第８回
むのたけじ反戦塾
手元資料

立教大学での講演より

第8回 むのたけじ反戦塾

日時：2024年6月15日（土）
　　13:30～17:00
会場：文京区民センター３C会議室
　　（地下鉄春日駅2分・後楽園駅5分）

プログラム：
❶　参考上映：「むのたけじさんを囲む会」
　（中帰連平和記念館2014年6月11日）
　＊詳しくはこの手元資料3ページ、資料❹「今回のむのたけじさんの映像」をご覧ください
❷　むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』
　結章「足元から世界を耕す」前半
　前半 P.159~177
❸　参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合い
　今回は「日本政府に戦争を起こさせないようにするにはどうすれば良いか？」
　についてみんなで考える

【この手元資料の内容】

資料❶　第８回むのたけじ反戦塾のご案内　P.2
資料❷　日本政府に戦争を起こさせないようにするにはどうすれば良いか？　P.2
資料❸　第８回 反戦塾へ　P.3
資料❹　今回のむのたけじさんの映像　P.3
資料❺　第6回むのたけじ反戦塾 2014/3/20発言記録　P.4~15
資料❻　むの反戦塾のこれまで　P16
資料❼　次回「むのたけじ反戦塾」のご案内　P17
資料❽　憲法を考える映画の会のご案内　P18
資料❾　憲法を考える映画のリストのご案内　P.19
資料❿　『希望は絶望のど真ん中に』結章「足元から世界を耕す」（前半）P24~20（左開き・裏表紙から）

資料❶　第８回 むのたけじ反戦塾のご案内

第８回 むのたけじ反戦塾のご案内

「むのたけじ反戦塾」は、一昨年（2022年）12月に第1回を開催して以来、これまで8回の学習会を行ってきました。

むのたけじさんが語り、書き遺された「戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ」の実現に向けて、その著作を少しづつ読み合わせ、また反戦への思いを語られたむのさんの講演などの映像を一緒に見て、参加した人がその感想を出し合っていくことを手がかりに、それぞれ自分が今、考えていること、とくに戦争の危機に対して思っていることを出し合って、話し合うという形で進めてきました。

むのさんが始めた「たいまつ」学習会や「むのたけじ平和塾」に習い、車座になって、それぞれが知り得た反戦の情報、最近学習・理解したこと、そしてずっと考えていることを出し合っていきます。

そして、この会で出された意見は書き起こし、この「手元資料」に掲載して共有していきます。必ずしも毎回学習会に参加できなくとも、この学習会でどんなことが話し合われているのかをこの「手元資料」を見ればわかるようにしています。
さらに、記録として蓄積して、それぞれこの時点で、どのようなことを考え、話し合って行ったかを振り返り、それをもとに更に話を積み重ねていきたいと思っています。

今回は、これまでの話し合われたことをもとに、「日本政府に戦争を起こさせないようにするにはどうすれば良いか？」と言うテーマについてみんなで話し合うことを考えました。

ご都合のつく方は、是非当日の「学習会」にご参加ください。また直接参加できなくても、ご意見をお寄せください。いっしょに考え、話し合いっていく場を拡げていきたいと思います。

資料❷「日本政府に戦争を起こさせないようにするにはどうすれば良いか？」

第８回反戦塾、みんなで考えを出し合いたいこと

「むのたけじ反戦塾」は､むのたけじさんが遺した映像をみんなで見て、むのさんの著作を毎回少しづつ読み、彼が訴え続けてきた「戦争絶滅へ」「戦争を殺せ」を、今の政治の、社会の情況の中で、どうしたら実現できるかについてこれまで７回の会を行い、話し合ってきました。

はじめは自己紹介を兼ねて、それぞれが考えていること、を出し合う形で始めたひとりひとりの発言も、回を重ねていく中で、それぞれが今、思っていること、「何とかしなければ」と案じていることを出し合うような形になってきました。

そうした中で、「第６回反戦塾」の時の発言に、「元旦の能登地震などで、災害復興支援で動員されている自衛隊員の活躍が報道されているのを見ると、彼らを『違憲の存在だ』って簡単に言えるのかと言う気持ちになる。今の自衛隊と憲法９条についてどう考えているのか､みんなの考えを聞きたい」という発言がありました。

そこで、前回（第7回・2024年3月20日）は、**「憲法と今の自衛隊についてどう考えるのか」**と言う設問をあげ、それぞれ考えてきてもらって、出し合う話し合いにしました。

事前に、参加者のM.T.さんから、自衛隊の実態や自衛隊に対する意識調査の資料をいただいていたこともあり、また参加者の皆さんが「今日は自衛隊の話をするんだ」とあらかじめ考えてきていただいたこともあって、とても活発でな話し合い担ったと思います。（詳しくは、この｢手元資料｣の４ページから15ページまでの「話し合いの記録」をご覧ください。是非。）

そうした発言の中には、「確かに」と納得させられるに加えて「へえ、知らなかった!」と驚かされるものや、「もっと自分でも調べて深めて行きたい」と思う発言がたくさんありました。
「これは若い人に『自衛隊と憲法』について話すときに使えるな」と思う話もありました。

そこで、今回、第８回の「むのたけじ反戦塾」ではさらに話を具体的なものにして行くために、テーマを**「日本政府に戦争を起こさせないようにするにはどうすれば良いか？」**とすることを考えました。
その答えはすでに前回の話し合いの中で、出てきているものもあります。
また、考えれば考えるほど、話し合えば話し合うほど、いろんな方法があることに気付くと思うのです。
それを、まずは、一人一人出し合って、なるほどと思う、納得のいく話だったら、それをまわりの人とのはなしの中に活かしてみましょう。

誰もが、戦争したらいかんと思いながら、なすすべのないまま、あるいはハラハラしてはいても、黙ってしまっていることが多いのですが、まずは話してみることにしましょう。　（花崎 記）

資料❸　第８回 反戦塾へ

第8回むのたけじ反戦塾に

今、日本で軍備を増強しようとする人々がよく話す言葉に、「攻めて来られたら、どうする」です。その言葉だけで、自公政権は南西諸島に多くのミサイルを配備したような気がする。しかし、そうしたことをする前に、「どこが攻めてくるか、」を特定し、本当にそうなのかを見極めることが先でないか。ミサイルを配備した場所からして、「中華人民共和国」とか、「朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）」とかを想定してのことだろう。しかし、中国には一つの中国問題で「台湾」が、朝鮮民主主義人民共和国は朝鮮戦争の休戦状態で「大韓民国」との対応が先になるのは明らかです。ということは、今度のことは日本が他国で行う戦争に加担するということが明らかです。実際、安倍元首相は「台湾有事は日本の有事」と言っていたではないか。この点に注目して、現状を考えねばなりません。

まず最初に言いたいのは、安保法制が決まる2016年3月以前なら、日本国憲法９条の「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」に抵触するか否かで議論され、他国の紛争に関わるようなことはなかった。今のような状況ができるように変えたのが安保法制で、これにより集団的自衛権行使が可能になったからです。
もちろん、安保法制は憲法違反でないかと多くの反対運動があり、成立後も全国２２の裁判所で２５の訴訟が提起されて争ってきました。最近、最高裁の初めての判断が東京国賠訴訟で示され、わずか数行の門前払いとも言える文章で、憲法判断をすることなく、上告を棄却し、上告事件としても受理しないというものでした。下級審での判決も同様なものです。憲法が変わっていないのだから、法律で外国に対する対峙の仕方が変わるはずもないのですが、判断を示さないという奇妙なことです。こうした不可解さからのアプローチももちろん必要と考えますが、ここで国の制度きまりから離れて、いわゆる「人間のふつうの感覚」から考えたい。

冒頭に述べた構図を単純化すると、AがBを攻めるかもしれないからBを応援したいCはそれに備えて軍備を整えたというものだろうと思う。Cが軍備を整える理由として、強力な軍備を見せることでAに侵攻を思いとどませるということらしいが、そのようなことで侵攻を止めることができるだろうか。一番最近のロシアによるウクライナの侵攻も、ロシアがAで、ウクライナがB、NATOがCと同じ構図があるような気がする。他国に侵攻、あるいは侵略すること自体悪いことであるが、ロシアはNATOのウクライナ支援やNATOの強大化を恐れて侵攻したと理由に挙げている。すなわち、ロシアとウクライナとの２国間の問題より背後にある支援する勢力の影響が強いと解釈されます。

軍備を増強がかえって、戦争に駆り立てる結果につながったことに注目したい。
確かに、武力を持っていれば、実際攻められた時に対抗できるメリットがあるかもしれません。しかし、ロシアーウクライナの戦争を見ても、これまでの多くの戦争を見ても、一旦戦端が開かれると、殺戮が止まらない。そこに住む人々の悲惨な状況になる。殺戮を繰り返し、物を破壊し尽くす戦争をしても何にもいいことがない。だから、絶対に戦端を開かせないことが一番大事です。相手をねじ伏せられるような強力な武器を持っても、恐れ入ることは少ない。非武装といえば、「平和ボケ」「お花畑論」と言われるが、決して国を明け渡すことを意味していない。高度な駆け引き、すなわち外交をして国を守ることだってできる。武力でおどさないほうが真の仲間を得やすいし、その後の共同で国を起こしていくことだってよりやりやすくなると思います。

私は武力がないと国を守れないというのは、植民地政策をやっていた時の名残だと思う。植民地から搾取し、国を富ませるというものです。しかし、今やグローバリズムの時代です。共生で生きていかねばならない時代です。そこには新しい考え方が必要なのではないかと思います。
そうすると、戦争をしないようにどうするかを考えることになります。このことにむのたけじは独特の考えを持っていました。個々の戦争に反対するという考えでなく、社会の仕組みそのものを変えていかねばならないと思ったようです。それを「戦争のいらぬ　やれぬ世へ」とむのたけじは言ったのだと思います。戦争が始まったのは稲作が始まって、国家というものができてからで、人類史史上で言えばごく最近のことになるから、「戦争のいらぬ　やれぬ世へ」は夢物語ではなく、実現できることだとよく話していましたが、具体的なことは何も話しておりません。だから、戦争のいらぬ　やれぬ世の中を作るには私たちが考えていかねばならないことになります。
すなわち、「戦争のいらぬ　やれぬ世へ」は、国際紛争には軍事力でなく、外交で解決すると言った単純なものではないと思います。もちろんそうした内容も含みますが、本質は社会体制を変えていくことにあるのです。とても難しいことだと思われがちですが、たとえば、国民全体で戦争は嫌だと声高々に言い続ければ、戦争を目論む人たちも戦争には踏み切れなくなるかもしれません。そのような単純なことも含まれると考えると、議論はできるでしょう。ただし、そこまで国民全体をまとめるにはどうするかという課題が出ます。実際にそのような社会にするには、もっといろいろな課題が出ると思いますので、そんなのも含めてみんなで考えていきたいですね。

資料❹　今回のむのたけじさんの映像

今回取り上げた題材は、中国帰国者連絡会の精神を今に伝える中帰連平和記念館の人たちと意見交換をした時の模様です。話がいろいろなところに飛んでまとまりがないのですが、ひとつのことをお伝えしたく取り上げました。「日中15年戦争」における戦犯処理でのできごとです。「撫順の奇蹟」と言われる、いままでの戦後処理と違うやり方で中国側が対応したということです。すなわち、周恩来は「復習や制裁では憎しみの連鎖は切れない。20年後には解る」という言葉のもとに、1956年の「特別軍事法廷」で起訴された1062人のうち政府・軍高官のわずか45人が無期も死刑もない軽い刑期に処したのです。アジア各地でのB、C級戦犯約1000人が処刑されたのに比べて軽い処分でした。しかも管理所においても自分たちの食事を削って戦犯たちを厚遇したのです。
このことを私は憎しみの連鎖を断ち切って、互いの国が共に繁栄することを願っていると受け止めたい。今、ウクライナーロシア戦争でも、パレスチナのガサ侵攻においても、過去の国家間のわだかまりがその根元にあります。戦争をなくすには、こうした国家間のわだかまりを解消することも大切です。その一つのヒントを与えてくれているように思います。とりわけ、今中国にわだかまりがあるような人もいるようです。「日本政府が戦争をおこさせないようにするにはどうすれば良いか」の一つのアプローチ面があるような気がします。（武野大策 記）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（１）

※「むのたけじ反戦塾の記録」は、毎回、参加者のみなさんの話されたことを書き起こして､次の回の手元資料に掲載させていただいております。ひとりひとりが、今考えていること、問題だと思っていること、あるいは**「戦争はいらぬ、戦争をやらぬ世へ」**という反戦への思いを出し合うことが最も大切だと考えているからです。
　また、みなさんのお話したことを書き起こし、記録とすることを通して、この「反戦塾」に直接参加していない人にも、みなさんが考えていることを伝えていくことが出来ると考えてます。
　しかしながら、録音したものから書き起こしているのですが、採録者の知識と教養の無さから、よく聞き取れなかったり、わからなかったりしたところがあります。採録しながらもこれは間違いではないか、と思いながら文字に起こしているところ（（？）や（＊＊＊）で表示）があります。
　ご自分の発言と思われるところで，間違いがありましたら、お知らせ下さい。修正して正しい記録としていきます。

●司会
時間になりましたので、始めさせて戴きます。
今日は第7回の「むのたけじ反戦塾」ということで、 映画を見てむのさんの講演の映像を見て、その後 皆さんでお話し合いをするという、 おかげさまで 6回目までだいたいそのパターンと言いますか、会の進め方がだいたい決まってきていますので、皆さんもそれに乗ってご自由にお話いただければと思っています。
代々木公園の方であの反原発の集会があるということで、ちょっとダブってしまって、重なって来られないという方もいらっしゃったり、他の用事で、といった方もいらっしゃるかと思うんですけれども、よろしくお願いします。 最初に見ていただくのは、むのさんがですね2013年にこれは潟上市の公民館で、地元の「潟上9条の会」の主催で講演会をした、その時の映像です。テーマが「今の憲法でなぜ悪い 99歳 むのたけじは吠える」と言うんだそうですけれども、 講演会を記録した映像ですので、あまり鮮明ではないのですが、映像を見ていただいて、今回、話し合いのテーマなんですけれども、前回ちょっと自衛隊とか自衛隊員のことを、自分たちが今どう考えてどういう風に問題として伝えていくかっていうところの話があったもんですから、それを受けて話し合いをやっていこうと思います。 （中略）最初に映像の方を見ていただいて始めさせていただきます。(～1:53:44：映画終わり)

2：04：13～
司会
手元資料に、前回の出た話を記録させていただいてますが、今回の皆さんのお話って言いますか、一通りまた記録としてここにいらっしゃってない方もどういう話が行われたかっていうことを聞けるような、伝えられるようなそういったものにしていきたいと思いますので、ちょっと今の映画でもそうなんですけど、音声があまり響きすぎかなって思って言うんですけどよろしくお願いしたいと思います。↗
いつも一通り、あの順番に話を聞いてですね その後その中で他の人から出た意見について、またあの考えたことを感じたことを話し合っていくという形で進めていきますが、きょうちょっと、小川さんが途中で抜けられるってことなんで、今日初めていらっしゃったんで、今の映画の感想でも結構ですし、また今一番感じられてることとか、そういったことも結構なので最初にお願いします。(~2：06：00)

●M.O.
　私は、むのたけじさんの名前とかは、ずっと知ってたんですけど、たまたま「さいたま市民ジャーナリズム講座」というのをスタートするっていう時の講師がむのたけしさんで、それでさいたま市の埼玉共済会館だったんですかね、最初は。さいたま新聞のサポーターズクラブとかいくつかの方々、門奈先生、立教大学の名誉教授のジャーナリズム専門の先生、それで、むのたけじさんが来て、初めて お話を聞いて 本当に唾がかかるようなものすごい勢力的な、生でむのさんのお話を聞いてもう本当に大好きになりました。 それでまあ「さいたま市民ジャーナリズム講座」っていうのをやってたんですけども、むのたけじっていう人の映画も何辺か見てますが、この小柄な体でパワーがあって言葉が本当に生きていて、こういう人がいて私のそばで喋って、唾がかかるような、みんなで記念写真も撮ったんですけど、そういうことを経験したからにはやっぱりもうちょっと頑張りたいなっていう思いで、私は熊谷で相方と2人で「さきたま新聞」っていうのをやってきたんですが、今ちょっと母の介護とか、相方も障害があって紙の新聞は出せてないんですけども、いつもいつも、その「たいまつ」っていう言葉に励まされています。
　今日このもう寒いし、どうしようかなと思いながらでもやっぱり来てよかったなと思うのは、やっぱり自分を大切にしなさい、かけがえのない自分、それから日本人として情けないっていうむのさんの言葉、 むのさんのような方に情けないと言わせてしまう私たち日本人、 私、あの本当に私恥ずかしいなって思いがいつもで自分が何かできないのかなーっていう風に思っています。子育てはちょっと失敗したんですが、いろんなこと失敗ばっかりなんですが、孫が生まれた時に、やっぱり未来っていうことをすごく考えました。原発もそうですし、戦争もそうですし、この新しい命ある人たちにそれをちゃんと私たち大人が責任を持って託さなきゃいけない、そういう思いがあります。
　それからガザのことでも何でもそうなんですけども、基本的人権 人間が生まれる場所によって、あるいは生まれる時代によって、人権がないがしろにされているという、本当に悲しいこと、それでまた憎しみは憎しみしか生まない、そういうことも、いつも思って、でも今、石垣さんから渡されましたが、本当に戦争ができる日本になっていくっていう戦争が自分のことになってきた「新しい戦前」、本当にもういても立ってもいられない思いです。でも負けちゃあ、むこうの、権力の思うつぼだろうっていうことで、今日も皆さん、みんなここにいる人たちは同じ思いだと思うんですけど、どうしてどうして、そうした日本人が増えていくのか、どうして税金がちゃんと使われないのか、わからないことばっかりです。ずっと学び続けて行くしかないんだろうなって思いますけれども、今の気持ちって言うことはそう言うことです。ほんとあの国会とかもほんとに恥ずかしい限りで、国会もそうだし、戦争もそうだし、私、テレビあんまり見ないんですけど、こう言うのいつも見てる子どもは、どういう風になるんだろうかって、ほんとに悲しいです。でも悲しい、じゃなくて、やっぱりやって悲しいじゃなくて、笑っていたいと思うし まあそんな感じでフラフラ やってますがいつもありがとうございます。皆さんもありがとうございます。（～2：12；17）

（次ページへ続く）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録（２）

●司会
　今日のビデオ、ちょっとあの音声が悪かったのか、あるいは、むのさんの話ってちょっと聞き取りにくいところがあるものですから。テロップでも付けたら良いんじゃないかなとも思ったんです。今まで7つか、8つのビデオを観て、その感想からと言うことで、その話が入りやすい、ということでやってきたんですけど、やっぱり同じように聞いてそれぞれ感じることってありまして、新しく感じることってのがあるもんですから、このビデオは、むのさんが、生前とくに晩年というか、本当に最晩年に有明の憲法集会で話したようなですね、そういったことをもっと残し伝えていく、あるいはそれをもとに考えていくっていう材料としてですね、使っていけないかなと思います。
　いつもでしたら、ビデオの感想からとか、そういったことからという入り方をするんですけれども、実は今回、前回の話の中で、やっぱり軍拡の問題とかそういったことを考えていく上でも「自衛隊っていうのをどういう風に捉えてるか」っていうことを提案された方が、みんなの意見を聞きたい、そういったことでお話がありましたものですから、それをちょっと頭に入れていただいて、その中にいつものように今問題にしていることはどういうことなのか あるいは何とかしなければならないのはどういうことかというような考えてること、あるいは今の映像を見てどういうこと感じたかってことを織り込んでいただいても結構なのですけれども、そういった自衛隊のことについてっていうことでお話を進めていきたいと思います。
　資料の2ページを開いたページの頭にですね。「自衛隊についてみんなで考える」っていうテーマでやっていきますということを書いてみて、その中で 前回の発言の中で出たのをいくつか並べているんですけれども、そういったことから話を始めていきたいと思います。これのお話をされた坂巻さんと土田さんがいらっしゃってますので、どんなことでそれを問題として提起されたかお話しいただけますか。（～2:15:55）

●K.S.
　この手元資料。まさに前回お話したのがそのまま、正確にあの再現記録されてますのでご覧いただくのもいいかと思うんですけど、実は私、前回こういう風に話した後、何の進歩もありませんで、ですからお話しするとすればこれを繰り返すしかないというほとんど意味がないことだと思うんですが、一つだけ申しますのは、私の頭にあるのはやっぱりその自衛隊＝軍隊っていう存在は憲法違反であることは間違いないだろうという感じがまずはあるわけで。同時にいろんな国と国の揉め事っていうかですね、トラブルその紛争そういうものをその軍事力で、兵力兵器で解決しようっていうのは基本的に愚かしいことなんじゃないかっていうね、子供みたいな発想ですけども、そういう感じがあるわけですね。
　でも、もちろんそれは、いろいろなね、それぞれの地域紛争、宗教が絡んだり、民族的ないろんな対立関係あるのは分かりますけども、でも大量虐殺を含めて、つまり殺し合いってことで、人間と人間の集団が命を奪い合うような、解決の仕方って言うのは、解決にならないじゃないかって言う、ま、ほんとにバカみたいていうか、シンプルというかそういう素朴な感じがありましてね、そういう子供っぽい感覚っていうのはすごく実は大事なんじゃないかっていう気がしてしょうがないですね。
　国際政治の話なんてなると本当にもうややこしい、いろんなファクターがそれぞれありますから、 どうしようもないんだっていうですね、そういう風になりがちなんだけど、でも殺し合いでなんか トラブルを解決するなんていうのは本当に解決にならないということも嫌というほど人類は学んできたはずじゃないかっていう、そういうことを声を大にして言いたいっていうのが、まずあるわけですね。そういう意味でも、軍事力という、他ならぬ日本でですね 持ち続けてる、 しかもその憲法に違反してるのはっきりしてるはずだってそういう感じがまずはあります 。
　ただ、この間申し上げたのは、その上でなお、最近とくに、十数年前の東北のね、東日本大震災の時もそうでしたけど、今回の能登のですね、地震の直後のいろんな動きをテレビは新聞などで見ていて思うのは、やっぱりその自衛隊という存在がですね、 その災害復旧、復興支援って言いますかね、そういう被災者を救うために、これからの地域づくりのためにポジティブな役割をしているっていうことは認めざるを得ない、単純にそう思うわけですね。それをどう見るのか、自分の中でどう整理するのかって言う位置づけが悩ましいという風なことを申し上げたし、今もほとんどそこから進歩してないという感じなんです。ただこの間申し上げたように、私なりに終わっていいのかっていうことで言えば、今現在思うのはやっぱりそのよく言われますが、政治的な判断と言うのは、どっちがいいかじゃなくて、どっちがより悪いかっていうですね、どっちがより悪い方を否定するっていうことで言えばですね、ああいう自衛隊の存在があるから憲法9条を変えてまで、自衛隊を正規に位置づけるっていう方が本当にいいのかって言えば、それはちょっとそのいろんな他の国との関係も含めてですけど非常に、むしろより悪い道だろうという感じはあるわけです。
　それはしかし感覚的なことであって、あんまり説得力というか、根拠というかないかもしれないんで、そういうあたりをちょっと皆さん、どうお考えになるか、よくアイディアとしてですね、もちろん防衛省より、災害省とか防災省を作れとか、あるいは自衛隊の何分の一かを災害救援隊に組織し直せとか、その再編論とか、まあいろいろ個別的に部分的にはあると思うんですけども、なかなか説得力とかですね、そういう広範な共感を得るには至っていない、そこのところを方法としてどういう具合に動かしていくのが、議論のあり方としてね、あるいは政治的に可能なのか、必要なのか、いいのかっていろいろご意見を伺いたいなっていう風に今も思っています。（～2：21:52）

●司会
　ありがとうございました。 やはり、前回自衛隊のことで、話をして戴いた土田さんから問題提起というか、土田さんには、この資料の中のですね、5ページから8 ページまでの資料をいただきました。私も「自衛隊のことを論じる」って言った割りには、その実態であるとか、どういう風なことが行われているのか、それから自衛隊員の意識であるとかそういったことを考えてみると全然知らないなって、知らないでそれはそれとしてっていう風な感じで自衛隊のこと、あるいは自衛隊が憲法とどうなのかっていうところだけの話をしてたと思って、そういった意味では実態を知らなくてはいけない、現状を知らなくてはいけないって考えて、やっぱり資料を用意しないといけないなと思ったんですけど、ちょうどその時に土田さんから資料いただきまして、すごく助かったというか、あるいはまた論点としてどういうことを考えていかなきゃいけないのか、助けになるかな と思いましたんで資料とさせていただきました。（～2：23：27）

●M.T
　もう5～6年前位からですかね、集会とか、デモとか、学習会とかに参加してまして、なぜ自衛隊を具体的に議論しないのかなという疑問を持ってたんですね。それで自分なりに今関心を持っていた分野なんですけれども、6ページに 内閣府の調査が出ています。これは去年の3月に、内閣府が調査をして、自衛隊に対する印象ですね。これがあの良い印象を持ってるという方が答えが90%、自衛隊に関心があるという方も80%ですね。それで自衛隊のどこに関心があるかというと災害の派遣ですね、 これがやっぱり大きいですね。　（次ページへつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（３）

それと7ページで、これは朝日新聞と東京大学で調査した結果なんです。去年の5月ですね。ウクライナ戦争が始まって、一昨年、防衛力を増強するということに対して賛成する人が64%、去年も62%というようなことで、日本もですね 防衛力を高めないと危険であるという風に考えてる方が大変多いんだなということはデータとしては、あるんだろうというふうに思います。

それで5ページに戻るんですけど、5ページに表と地図を入れてあるんですが、この地図で見ますとですね、日本列島と韓国と北朝鮮 これが中心に東アジアと言われてるんですね。ここにロシアと中国が入って、太平洋の向こう側にはアメリカがいるんですけど、これ世界地図で見るとですね 1パーセントか2パーセントの狭い地域だと思うんです。ここに、世界1位からですね、1位、2位、3位の軍事国家があってですね。 日本も韓国も世界5位、7位と言うことで、大変な軍事力の集積が今始まっているわけです。軍事力を高めれば高めるほど危機が高まって、緊張がぶつかり合ってしまえば、紛争戦争になる可能性が高くなってくると思うんです。それでこの地図を見ながら、日本はどういう風に安全保障というのを考えたら良いんだろうかと、それが多分大事なことだと思いまして、世論調査の傾向で、防衛力を強くした方が良いという人が65パーセント、多数派になっているんですけど、この軍事力のぶつかり合っている地域で、どういう風にしたら本当に日本人の命や財産が守れるのかということは 客観的に、冷静に議論した方が、いいのだろうなと思ってます。

マスメディアも含めてですね、軍事力を高めていくことが前提になって今、ニュース報道がされているように思うんですね。自衛隊が、軍事力が高くなりすぎて、ちょっと危険じゃないかというような議論があまりないように思われます。YouTubeでたまたま一昨日、沖縄県のうるま市で自衛隊の訓練場を作るので、住民説明会というのがありまして、それの動画が出てたんですね、1時間見てたんですけども、防衛省の担当官はですね、 中国が東シナ海に軍事力を増強して、出てきていると、それで非常に日本を取り巻く安全保障環境が厳しくなってますと。だから日本は防衛力を高めて抑止力を高くしないと攻められてしまいます。だから自衛隊の訓練場が必要なんです、と。それは旅団を師団に格上げする上で、どうしても訓練所が必要と、ということをうるま市の方々に説明してるんですね。だからもう防衛省は、中国が敵で、敵が軍事力を増強してくるんだから、こちらも増強しないと負けてしまうと、そういう理論なんですね。もちろんうるま市の方々は全く納得しないわけです。そんなところ、こんな住宅地に訓練所なんか作られたら困ると、で、今うるま市は、自衛隊の訓練所の問題と、ミサイル部隊の配置がもう進んでいるんですね。ただ、訓練所の方は、まだ決定事項ではないので、反対することができると言うことで、うるま市議会も全会一致で、反対決議をあげてます。ただミサイル部隊は、ミサイルがもう運び込まれてしまっているので、石垣島も同じくミサイルが運び込まれてしまっていますね。

これは人認識ミサイルといって、射程が200キロ、で、地対艦ですので、宮古島と石垣島の間が400キロ位あるのですけど、ここを中国の軍艦が通ると、石垣島か宮古から撃てば、中国の軍艦に当てることができるんですね。だからミサイル基地を作っているんです。迎撃ミサイルを置くんだったらPAC3で、当たらないわけはないんですけど、地対艦ミサイルを配備するとなると、これはほんとに、中国の敵対行動を抑止すると言うことになりますから、これがですね、人認識ミサイル、射程200キロを置くだけでなくて、ここにトマホークとかを配備してしまうと射程1600キロですので、しかも巡航ミサイルですから中国の沿岸から内部にも届くミサイルを配備してしまうとなると、 多分中国は心を静かにはいらないですよね。これは日本が中国をねらいに来ていると、逆に思ってしまうのだと思います。

この地図を見ると、日本も中国と近いですからね。そういうことで、この自衛隊についてですね。市民はやっぱりきっちり議論をしておくべきだろうというふうに考えてます。できればですね 、ちょっと自衛隊がモンスターになりつつあるので、できたら軍縮の方に向かっていけないだろうか、と。自衛隊を軍縮させていってもですね、日本は島国なので、簡単に攻められない。占領されることはまず無いですね。

沖縄戦が、米軍がですね、52万の軍を配置して、沖縄を戦場にして戦われたわけですけれども、沖縄で大変な犠牲が出てるんですが、52万人体制、それから本土決戦て言われた日本はそれを準備したんですけど、アメリカ軍の配置がですね。九州と房総半島とに上陸するって言うことで、1945年8月、11月に本土上陸戦争を考えていたみたいですが、これが100万人なんですね。 だから島国を攻めると言うことは非常に大変なことでして、多分防衛省が言うようなですね、日本が攻められて、島が占領されるってことは多分難しいことなんじゃないかと私なんかは思うんですけど、いろんな議論があると思うんで、市民としていろいろな考え方をまとめて行ければいいのかなと思ってます。

それで個別的自衛権というのは9条があってもですね、個別的自衛権は日本はもっているんだと言うことで、武力行使はできるという「武力行使の三要件」（註＊❶）というのを個別的自衛権の定義のとこで書いたんですけど、今ですね、集団的自衛権が行使できるということで法改訂がされたので、武力行使の新三要件（註＊❷）ということで、文章が変わってますので、その資料が入ってなかったのでそれを皆さんに見ていただきたいと思います。

（註＊❶）「自衛権発動の三要件」は、「①我が国に対する急迫不正の侵害があること、すなわち武力攻撃が発生したこと、②この場合にこれを排除するために他の適当な手段がないこと、③必要最小限度の実力行使にとどまるべきこと」（同一三頁）である。集団的自衛権の解釈に関する質問主意書 - 衆議院

（註＊❷）憲法9条の新三要件とは？
平成26年（2014）安倍内閣が閣議決定した。 [補説]政府はそれまで、（1）我が国に対する急迫不正の侵害があること、（2）これを排除するために他の適当な手段がないこと、（3）必要最小限度の実力行使にとどまるべきこと、を自衛権の発動としての武力行使の三要件としていた。

今まではですね、自衛隊が武力行使できるのは、わが国に対する急迫不正の侵害があり、これを排除するために他に適当な手段がないこと。必要最小限度の必要最小限の実力行使にとどめることと言うことになっていたんですが、集団的自衛権行使によってですね、文章が変えられて「わが国に対する武力攻撃が発生したこと、または、わが国と密接な関係にある他国に対する他国に対する武力攻撃が発生し、これによりわが国の存立が脅かされ、国民の生命、自由、及び幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険があること」というのが新しく加わったんですね。これが武力行使するための三要件となっているんですけども、このわが国と密接な関係にある他国とはどこだろうか、とかですね、わが国の存立が脅かされ幸福追求の権利が根底から覆される様な危険があるってことは、どういう状態なのか、非常にこれ原則とは言え、あいまいな内容でして、その時の政権によって都合良く解釈されてしまう。だから日本が、自国を攻められたわけでもないのに、外国に行って親密な国が攻撃されている時、親密な国を助けるために他国に行くとかですね、存立危機自体いったい誰がどういう風に判断するのかって言うことわからないということで、この武力攻撃審査用件っていうのが非常に批判の的になっています。それを含めまして自衛隊について皆さん自由に意見を出し合って、自衛隊について市民としてどう考えたら良いか、ここで是非、皆さんの考えを話していただければなと思います。

●司会
さっきのお話しにもありましたように、私もその意見を聞いたときに、自分たちが今ずっと、憲法と自衛隊と言うことで、自衛隊は憲法に違反だ、違憲だと言うことを思い続けてきてそういった活動というか、そういったことに役立つ活動をしてきたつもりではいるんですけど、今、自衛隊が憲法違反だって言うことを例えば、身の回りの若い人に話したときに「何の話？」という話になる、この資料の中にも意識調査がありますけれども、意識として自衛隊があって当然といいますか、自衛隊の問題はあるけれども、あって当然と思っている感覚を持っている人がほとんどなのではないかという気がしているわけですよね。

（次ページへつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（４）

そういったことに対して、でも、自衛隊自体がどのような危険を持っているか、あるいは憲法で、自衛隊、あるいは戦力を持たないと言うことにはどのような背景があるのか、いくつかのところで、ちゃんと自分がつかんでですね、それをまた若い人たち、それを知らないでいる人たちにあるいはそうを思っていない人たちに、こう伝えていく、話していく、説得していく、納得してもらう、そういうことをやっていかなきゃいけないか、ずっと考えてきたことでそのためにきょうの会もですね、皆さんの意見、皆さんの実感、どう思っていらっしゃるかと言うことを聞きたいなと思っているんですけど。

そうして、その中で役に立つと言いますか、例えば若い人たちに話していくんだったら、こう言う話は説得力あるよって言うことがつかめれば、前回は資料の中でも、皆さんの話の中で、出典と言いますか、出所をかいたものを脚注みたいにしたんですけど、それだけでも読んでみたいという話をしていたものですから。そういったことをお話し戴いて、あまり正しいのはどちらだという話よりも、「そうなんだろうか」という話をしていければと思っております。（～2：38：45)

●S.Y.

わたしが「むのたけじ反戦塾」に出たのは今日が初めてです。むのたけじさんのことについて、若い時から関心をもっていたのは、あれだけの戦争に加担し、翼賛体制を敷く中にがっちりと組み込まれた日本のマスコミが、終戦後どのように落とし前をきちっとつけたのか、つまり総括したかったかと言うことで、攻めて私の知る限りでは、むのたけじさんは、自分が、戦争翼賛体制に朝日新聞を通じてやってしまったんだと、これを反省なさって、辞めて後ろを振り向いたけれども、むのたけじさんが辞めるんだったら俺も、というのが一人も出てこなかったというのが、今、私が持っている認識です。

従ってその行動を持って、「たいまつ」を掲げたってことに尊敬の念と、私もジャーナリストの端くれとして10年前の元気な講演記録が今日、見ることができましたので、大変ありがたいひと時だったと思っています。

それで、三人の方のご発言も含めまして、私なりの考えをちょっと述べてさせていただきます。私は3点あります。1つは今度の戦争ですね､ウクライナ、ガザの戦争もそうですけど、映像を見ている限り、私も何が真実か見切れておりません。ただはっきりしているのは、普通の国民なら気付くはずですけど、軍隊というものは、日本の自衛隊も含めてですね、これはコマに過ぎないんですね。吹けば飛ぶようなコマです。 あくまでもその背後にあるのは資本なんです。資本、日本で言えば６大財閥を中心として、大東亜戦争からシベリア出兵まで含めまして。

その時に、資本が国民を惹起させていくのに使うのが、共産主義です。つまり、１９０５年から１９１７年まで起こった第一次ロシア革命、共産主義の脅威、これを旗に刷れば国民は動くと。これ共産主義を今日現在まで利用しまくっているわけですけど。それから露骨に表れたのが自民党政権のこの間事件として表れた「勝共連合」なんです。名前を４回ほど変えていますけれども、根本は勝共連合と。勝共とは、勝つ共産主義、ロシア革命を資本の利益のためにうまく演出に使っていくその技巧、巧みさ、それは資本というものが恐ろしいものだと言うことを今度の二つの戦争から、国民がどれほど理解しただろうか。死んでいく兵士なんかは、命ある人間と考えていません。資本は。当然のことです。いくらでも利益を生むためには、死んでもらうと言う前提で資本は動いていますから。これは歴史が証明するものであって、もし反論する人が有ったら私、論争してもいい位です。いっぱい資料があります。それは『戦争と平和』というロシアの名著を含めて、戦争という背景に戦士たちの家族はどうのなどと考えたら資本は生き残れない、今までうまく、ロシア革命以降の共産の主義をてことして使った。その典型がボルシェビキ派を中心とする世界共産主義活動で、日本にもすぐに伝わりましてね、 そうした人たちのことを今国会図書館で、全部資料洗ってますけれども、例えば日本の一流の京都大学や東大を中心にマルクス主義に傾斜してきますよね。

大方がマルクス主義に傾斜し、そして言動としてロシアに対してお参りを繰り返すんですね。すごいですよ、それはもう。それは歴史的記録ですから。 嘘をつくことはできません。その真実は国会図書館で全部記録を見ることができます。

私も見てますけれども、何が言いたいかというと、現代においても あれから1905年から17年かけて18年に ニコライ2世以下を全部銃殺しましたが、そのニュースはラジオもない、テレビもない時代ですから、活字で入ってくるんですよ。まさにこれですね。これで入ってくる。その時にまさに恐れおののいたのが太宰治ですよ、

太宰治はまだ18歳でしたけれども、103年前に発足した共産党にすぐに接近して共産党に入ります。で、彼は『細胞文芸』というのを出しまして、俺は共産党に心服してるわけじゃないと言うようなことを言い訳しながら文芸活動とそれやってきます。そういう歴史的事実をずうっと辿っていくと、今度の戦争が皆さんに分かりやすく、自衛隊も含めて、軍隊というのはあくまでもコマとして資本家に使われている存在に過ぎないんだなって嫌と言うほどわかると思うんです。これで話からわからなかったらね、この関係は、先程のデータではないけど、７割の方は認めている。だから防衛ラインで、戦後処理、沖縄を戦場にしたってことは天皇制に絡んでくるわけですよ。だけど沖縄の闘いで天皇制まで踏み込んだ論議をする識者がほとんどいない。これはやっぱり日本のためにタブーな点ですね。なぜかというと日本の共産党もそうですけど、はじめは天皇制廃止、自衛隊ももちろん廃止でしたね。どうですか今、両方とも認知してます。共産党も。だから結党102年続いているんです。共産党が残念だったと思うのは、共産党のやりたかった立党当時の3つのスローガン、全部進駐軍が先取りしてやっちゃいました。だから共産党の出番がなかったんですね。もうひとつあげますと財閥解体、それから農地解放、ロシア革命って言うのは、ロシアの農奴、農民の奴隷をどう解放するかってことで成功したんですよ。工業じゃないんですよ。だからフランスとかイギリスとかイタリアとか 先進ヨーロッパの防衛、ボルシェビキの連中が情宣活動、つまりオルグに行ったときにバカにされるんですよね。俺たちはもう市民活動をやっているんだ、その矛先が日本に向けられたってことは、これは、歴史の必然でしょうがないですよね。だから日本はやむなく、ロシアの力を削ぐためにシベリア出兵させたんです。戦争もすべて、共産主義のからくりを使って資本が膨らんでいく、増幅するために使われたに過ぎない、これは全然からくりのメカニズムは今も変わりません。

２点目で申し上げたいのは、先程申し上げたように、九条のからみで、沖縄を語っても解決の方向は全然見えません。これは天皇制を含む、日本の政治構造に迫るようないい論文が全然出ていません。とくに革新系の連中、はっきり申し上げますけれど、それだけの凌駕するような論理展開ができているような識者は私が知る限り一人もおりません。これなぜ迫り得ないのか、そこがまた資本の力、すごいです。資本はイメージ戦略でもまともに成功しています。だからこのデータを見ても、まあこのぐらいはあたりまえだなと、私はジャーナリストとして現場におりますからよくわかります。

3点目に何が言いたいかというと、このむのたけじさんが99歳でも、あれだけの情熱を持って語りかけた。そのコミュニケーション能力というものが、資本に有利なように記録されているんですよ。もうひとつ申し上げます。批判精神をもっても幻想のなかで、何かやっているような感じを持つように国民に持ちかけていく、そういう情報戦略がきつく語られています。教育の中に。つまりほんとうの批判と言うのは、自分に跳ね返ってくるんですよ。自分に跳ね返ってくるような批判行動にもっと哲学的に目覚めちゃうので、そういうことをないような教育をします。 もう一度申し上げますと、すべては人のためであると。つまり自分を犠牲にしても人のために動ける日本人だけじゃなくて、ほとんど生まれにくい状況になってますね。どうしてか、それは定数化していく利益誘導ですね。利益で会社はこれだけ伸びて、お前たちはクビがつながっているのは、こうこうこういうせいだと。人殺しのために軍事予算を拡げていくとは一切言いません。

（次ページにつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（５）

　あくまでも平和を守るため、国民の命と財産を守るため大義名分は徹底して教育していますから、自衛隊員が多い、少ないはともかく、私も基本的には疑問をもったけれども、最高裁を含めて、これを統治行為としてほんとうに裁判で吟味することは一切なかった伊達判決でさえ、進駐軍は憲法違反であるという違憲判決がものすごい。伊達さんの伝記を読んでみると、陪審者二人の裁判官の前で、胸から辞表を出してますよ。俺は辞表を持ってこの裁判に臨んでいるとまでいっています。ところが3日もしない間にアメリカ大使館の公使がきて、最高裁判所の田中耕太郎までが「わかってますから」これは、今の言葉で言えば、「チャラにしますから心配なさらないでください」と、この歴史的事実についても、今やっと光を与えようとしているのも全部これ、アメリカの公文書館で記録された資料が、もとになっています。それは、私も今やっているんですけど、そういうことで情報操作、マニピュレーションですね、これに対してジャーナリズムは、とりわけ、PRの会社ですね、ここで関係者もいるなら、はっきり言うのは憚りますけれども、つまりそういうPRの、つまり情宣活動の真髄を国民の骨まで変えていくために膨大な金を共産党、共産主義をてこにしてやるっていう構造が出来てるんです。これにくさびを打ち込み、矢を放つだけの指揮者が、なぜ日本に出てこないのかと加藤陽子さんなんかと話してみると、その辺のお話はもっと面白くなってくるんですけど、やっぱり歴史的な中で突いかなきゃならない問題だろうと思います。だからむのたけじさんの精神、あの迫力ある話を活かすためには、ただ聞いて語り合うだけじゃなくて、政治行動になぜ、若い方々含めて、国民が7割 8割、投票率が高いからいいって言うんじゃないんですよ。政治に無関心のまま過ごしても何とかなると思ってる国民が圧倒的に、これはもう戦略で成功しています。そういう風に国民を渋っていく仕組みになって、つまりイメージ戦略で完璧に資本側が勝利を収めています。残念ながら我々ののんきな、脳天気な、そしてとくに私も含めて反省しなけりゃならないのは、革新とか新しい世界を築こうとしたとしたような連中が、ちょっと自分の幻影に酔っている感が非常に強いです、このところ。そういう意味で文壇も衰弱してますし、歴史の記録というものから学びあって、じゃああなたは何ができるのかという資本との対決、資本の巧妙な戦略、メカニズムに対して一本矢を加えるだけの方法について具体的に行かないといけない。 とりわけ地方自治の選挙で村とか町ですと自衛隊員の家族ぐるみで来て、そして選挙の前だけ自衛隊員を増やして、もと、某宗教団体がやった方法ですけど、同じことをやってんですよ、国が。この前の沖縄の地方選挙に勝てるはずがない。自衛隊の家族ぐるみで、坊ちゃんは東京に帰ってもらうとか後で操作してるようですけれども実際にああやって家族ごと地域で住んでいる人だと、住民としての＊＊＊です。長年沖縄に住んだ人も、昨日はじめてここへ家族としてきた人も、今の憲法の下で長年住んでいるから俺の法の話を聞けなんて、そんなバカなことを言う人は一人もいません。ですからその数の操作で、このまま行きますと市町村の選挙でも、村議会でも、町議会でも、どんどん資本の側が発言できるだけの合法的なテーブルを作り終えつつあるという危機感、以上3転申し上げて私は83歳、もう何を言っても、近いんで、最期の言葉として今日は、発言させて戴きました。（～2：54：31）

●R.S
　いやあ今日、矢間さんに会えると思わなかったのでとてもうれしいです。長年の付き合いで、ちょっと年は下なんですけどね。ずうっと今までやってきて、情熱ある話を聞けてうれしいなと。
　私はここずうっと出ているんですけど、12ページと16ページかな、何か私のことをしっかり書いてくださっているのですけど、自衛隊のなかでも自衛隊員がセクハラ問題でも勇気ある発言をして、今動き出していますね、女の人たちも。私は男の子と女の子の二人、男の子の喧嘩っていうのをさっき子どもっぽいとおっしゃったけど、ほんとに男の子の喧嘩ってしますね、男の子は。父親と息子っていうのは、何だか会話が外から見てて、しっくり何だか難しいなと思ってます。
　なんか私はメスとオスとちょっと違うんじゃないかなと思っていて、私は母親の平和への責任というのをすごく感じていて喧嘩を見てて、喧嘩が人殺しまで行かないようにするのは母親の教育っていうのが すごく大きいんじゃないかなっていうふう思っています。今も「新三要件」が、これもとても気になっているんですけど、やっぱりいよいよ女性の出番の期待する時代になってきてるなと思います。 世界中人類半分女ですからね 。なんとかそこが頑張んなきゃ。平和な持続可能な人類はないんじゃないかなって付け加えて今日の感想です。(~2：57：28)

●武野
　ちょっとだけつけ加えて。むのたけじさんの考えも母系社会だって。要するに男はすぐ戦争をやるんだから、要するに母系社会にしたほうがよいと。人類はもともと母系社会から発したもの。それがあの農業ができてきて、その上で国ができて、そのために戦争をやるようになったった。そうなると、力の強い男性の幅を利かす社会になったとそういうような考え方でした。ちょっと付け替えさせ手戴きます。(~2：58：08)

●H.N.
　自衛隊がらみって言うんですかね。自分自身がいろいろ思いをはせているんですが、バラバラで、全体像を作らない。今の時代で行くと、イスラエルのガザの話をですね。基本的にはメディアジャーナリズムの問題と思っているんですけど、ハマスがテロをやったその逆襲でイスラエルがやってっていう、そういうキーワードにジャーナリズムが頭に入っているんですよ。
　何遍か機会があって岡真弓さんですか、早稲田の人の話を聞いて、ぎくっとしたんですね。ガザの歴史、パレスチナの歴史ってことを突きつけられて、ただそういう報道は流れない。メディアの報道はハマスのテロ、イスラエルの逆襲。あくまでいくつか見れば明らかにジェノサイドだと、南アフリカが国際司法裁判所にジェノサイドと訴えましたよね。それ以上ジャーナリズムがリピートしない。あるいは広めない。多分ジェノサイドという話を聞いて理解しようとしていくと、もう1個、歴史の話で、我々が昔、韓国に対してジェノサイドの話があるじゃないですか。それをも勉強する気になる。ただマスコミが出すキーワードは、イスラエルがあって、ジェノサイドって何だろう、日本が過去にやったこと、あるいは関東大震災でやったことを、あれジェノサイドだよねって、ぐるぐるっ勉強が廻ってくるんですね。そういうつながりを起こすような、勉強をきっかけに、ある事件、キーワードを学ぼうという姿勢を持つようなことを、ほんとはメディアはやってほしい、それが考えててやんないってことね。あくまでイスラエル寄り、アメリカ寄りの報道しか流さない、それが一つの大きな問題と思っています。
　自衛隊の話も前回も言ったかもしれないですけど、能登半島地震の時に、一番優秀な第一何とかという訓練受けている部隊が 正月の5日 6日にですね、千葉の方で、出初め式をやってる。外国とやってる。 1日に能登半島に行ってね、ああいう空挺部隊なんか行ってなきゃいけないのにこっちで出初め式やってるんですね。そういう話も、ちらっと報道はして、防衛庁長官、何とか言ったけど、それを追っかけないんです。ほんとは、災害救助とかに自衛隊まっ先に行くべきじゃないか、マスコミはその後追っかけない。一言防衛庁長官がいや行きますよ、といったら収まってしまった。いくつかのきっかけをもとにですね。それを組立てて、われわれ市民に学ばせるようなことを報道が組み立てなければいけない。僕自身ほとんど頭弱ってきてますから、画面画面で刺激は受けているんですけど、それを組み立てるのが弱いからそういうところ勉強するしかない。
　そういうチャンネルを報道番組、まあ勉強番組ですけど、がんばってほしい、NHKとかね。あるいは前川さんらがテレ朝に対して「ものいう株主」をやろうとしていますよね。 あるいは民間側でもそういうことやろうとする動きをしないと、どんどん日本人我々の頭はプロパガンダばかりになって来ているので、そういうことを出し報道側の姿勢が一番大切ですよね。

（次ページにつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（6）

それをもとにした、教育の組み立て、組み替えっていいますかね、事実を元に考えるようなことをしなくちゃいけないと思ってます。で、僕自身が昔若干学んだ勉強を今だから、学び直そうと思っています。

今高校で、歴史総合、日本史探究とか、代わって歴史総合ってできたんですよね、あれがどうなっているか、これから見たいと思ってますけど、ああいうところに材料を提起して、考えるきっかけを与える教育に組み替えればと思っています。

今回の会に参加してきましたけど、憲法を考える映画の会で見て、日本人の加害の歴史を考えるきっかけをもらったんですよ、そっから来る＊＊＊、だから日本人の加害の歴史を考えるきっかけ、あるいはそれを知るドキュメント、映画、歴史を学ぶきっかけを教育に組み込んで、一人一人が歴史を学びましょうというきっかけを与えることが大事だと、それからに日常のメディアは、今の事実をですね、ジェノサイド、そういった事実を受けてちゃんと考えるような材料を与えて、どんどんフォローする、自衛隊行けば、沖縄で自衛隊基地ができて、ミサイルできてという話が、報道弱いですけどね、国会で議論されているかわかんないですけど、何で国会で議論されて入ってくるかわからないですけど、沖縄の報道をちゃんと本土に伝えて、「これなあに」と基本を提示して投げるのをメディアに向けて持っていますと思います。メディアの役割と教育の組み立てといいますか、考える材料を提示してやっていくことが大事かなと思っています。（～3：04：42）

●K.N.

私の知っている身近な話をしたいと思います。

自衛隊の話なんですが、私の会社に、あのちょっと問題拡げちゃうかもしれないんですけど、自衛隊朝霞駐屯地に勤めていた人がいて、ちょっといろいろと事情があって、うちの会社に入ってきたんですけど、もし、ちょっと世間話で、そういうのあまり良くないかもしれないんですけど 北朝鮮が入ってきた時にどうなっちゃう 日本は。そのときにその人が何言ったかというと、私は自衛隊辞める時に、自衛隊ってよりも 防衛庁からだと思うんですけども一筆書かされたって言うんですよ。 多分、皆さんの中で身近な方いるかと思うんですけど身近な方がいたら同様だと思うんですけど、 日本の有事が起きた時にその一般市民って言うんですか、一般企業に勤めてた人は、自衛隊に戻るっていうんですかね、戦いに参加することを認めますか、みたいなことを一筆書かされるらしいんです。それで判子押さないと、辞められないじゃないけど、そこまで強要みたいなものが、知ってる方は知ってるかと思うんですけども、ちょっと怖いなと思って。まあ日本を守るという意味ではいいかもしれないんですけども、言い方悪いんですけど、せっかく辞めたのに何かあった時に戻るしかねえのかなんて愚痴がてらに言ってました。だからそれが日本社会でいいのかどうかってことは別問題なんですけども。、

あと2つ目は、能登半島の自衛隊の救出作って言うんですか 報道されてると思うんですけどもなんかあんまり結果的にうまくいってないというか進んでないって話が皆さん思ってると思うんですけども、私 2、3人の方からちょっと聞いたんで間違いないと思うんですけども、日本の中で自衛隊が救出しにくい場所っていうのが何箇所かあるらしいんだそうです。知り合いの甥っ子さんたちが、自衛隊に勤めているって人が、何カ所か救出しにくい場所がある、それが能登半島もそのひとつらいしいんです。多分道だとか 海だとかなんとか、それは条件あるかと思うんですけども、それで、ちょっと遅れてるんだってのこと言ってました。聞きづてでほんとに部隊にいる人なんですけども。 空からぼんぼんヘリコプターって言うんですか、ヘリコプターでやれば良いんじゃないかって簡単に言ったら、そうもいかないみたいで、一つに集中しちゃうと、それこそ言いがかりなんですけど、日本が攻められたらどうするんだって。そういう言い方するらしいんですよ。自衛隊の人って言うのは。だから2~3機しか出せないとか、そんなことを言ってました。だから救出って言うのは、どういう形で、自衛隊が主になっちゃうのかなと思うんですけど、その民間でもそういう＊＊＊が悪いじゃないですか、そういう言い方も良くないんだろうと思うんですけど、私たちも考えていかなくちゃいけないんじゃないかなって思いました。

じゃあどうしたらいいかって言うときに、まあ1つの考え方として自衛隊を否定してその災害救助隊みたいなものに作り変えるとか、あるいは半分半分にしてですね、半分は救助隊にしてっていういろんなアイデア的には見たり聞いたりしますけども、それもまあ現実的ではない、当面の現実的な答えとは言えないという中で、まあ私なりの今現在の仮の答えとしてはですね、こうかなと思うのは、つまり確かに違憲、法律的あるいは憲法論的には違憲だというのはまず押さえた上で、しかしその単純な議論では矛盾、 ある種の矛盾を含んでいると、つまりそれ自体に否定することによってああいう災害救助的な原理を行われている活動を否定することは難しいだろうという、できないだろうという意味で矛盾を感じる。だけどもその矛盾を超える、無くすために、九条の規定そのものを変えるとか、無くすとかっていう方向とどっちの選択肢がより良いかということで言うと、やっぱり九条を変えるという方は問題なんじゃないかと、そのままっていう規定でそれを理想として掲げ続ける形で、それに少しでも近づけていくっていう方向を目指すっていう、そんな感じがいいんじゃないかと個人的に思うんですけどね。でもまあこれはいろんなご意見があると思います。だからちょっと伺いたいなっていうことがひとつ。

で、そういう自衛隊の問題とそれが全然、別のこと、もう一つだけちょっと言わせていただくと、さっきの映像を見て思ったんですけども、つまり若い人たちとの関わりということ、さっきの高校生、定時制の人たちでしたけど、大学生との関係でっていうことでですね、具体的なちょっと経験をしたもんですから、それをご紹介したいと思うんです。私、たまたまむのさんと同じ東京外大を出ているんですけども、外大の去年の11月の大学祭っていうので戦争っていうものを取り上げて一つのプロジェクトが実現したんですね。それはたまたま去年が学徒出陣 80周年っていう節目でもあり、これももう1つはたまたま外語大って言うのの前身ができてから、ちょうど150周年だっていうことで大学としても、なんか変わったことをやりましょうっていう動きがあってそれに答えて学生が、つまりまあ 10人ぐらいのあるゼミの学生たちがですね「戦争と外大生」っていう、これチラシなんですけど、こういうポスターもこう言うでかいポスターを作ったりして、「戦争と外大生」っていうプロジェクトを去年の初めぐらいに立ち上げて、それに卒業生、OB の有志も少し協力しようっていうつまり歴史的なことなんで、過去のことも多少とも調べる上で協力しようということで、数人の、私自身はほんのちょっとしか関わりませんでしたけど、とにかく去年初めからその11月下旬のその大学祭でのいろんな5日間、大学祭あるわけですけどね、その間いろんな展示やら映画の上映だとかですね、講演記録の映像の上映だとか、いろんなことをやったわけです、で、何が言いたいかって言うとですね、多少、横から見てて、いまの大学生ってどれくらいの人が、こういう問題で動いて調べたりするのかとも思ってたら これがものすごくみんな熱心にですね、よくやったんですよ。 いろんな資料にあたって、「戦争と外大生」っていったって問題が大きすぎて、実際には3人の、ちょっと注目すべき人の人たちが戦争の中でどうなってたかっていうのをいろいろ探ったんです。その一人だけ言うと芥川龍之介の息子っていうのが、外大生だったわけですけど、戦争で亡くなるというので、この人が実はものすごいやっぱり作家的な能力持ってたんですね、これがいろいろ実は調べてみると作品が残ってるっていう風な、まあそういうとこまで含めていろいろやった、その調査のありようも感心しましたし、ま、なんていうか楽しみながら、しかもネットを使っていろんな情報公開やりながらやってるのも全部こう見えるわけですけども、なかなかすごく「今時の学生は」なんてちょっとね、否定的に僕なんかも見ちゃうわけですけど、ちょっと違ったかもしらんなっていう感じになりました。

（次ページにつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（7）

●司会
　さっきの話の中で、朝霞の方は北朝鮮が来たらどうするんだってことに回答はなんていってたんですか？
西原
　参加するっていってました。部隊に戻るって言ってました。多分朝霞でも武器を使ってたんじゃないでしょうかね、鉄砲とかそう言うのをきちんとできる人間だったのかもしれません。（～3:09:49）

●S.Y
　志賀原発が1日現在から2日間、フクシマの二の舞になるおそれがあって、情報が表に出ないという状況にあって、自衛隊がそこに行くのは､これはもう大変なことですよね。フクシマの場合はメルトダウンはっきり認めてから行ったんだと。あの2日間て言うのはクエスチョンだったんですよ。情報も。原発がらみじゃないかなと言う情報が私の耳には入っています。　（～3：10：26）
●K.N.
　あ、それとは別に珠洲市に原発が作られる予定だったらしいんですけども住民の猛反対でなくなったと言うことは良かったなと思っています。（～3：10：56）
●T.I.
　安保法制違憲訴訟で原告で闘っている石垣です。
　今ちょっと2、3聞いただけでね。僕は世論に負けてると思いますね。特にゲーリングって言う人が言ってるんだけどね。「市民をだますのは簡単だ」と、「攻めてこられたらどうすんだ」とそういうことを言えばたちまちですね、「武力を持たなきゃいけない」そう言うのにほんとに負けてる。ふざけるなと僕は思いますよ。
　だって日本は戦争のできない国なんだ、という認識がないで、守って戦えば闘えるみたいなそういうアホなのがたくさんいるんだよ。原発だって60基有るんだからね。休止してるの含めてね。公式に60なんですよ。止めてるの入れるとですよ。3基壊せば日本はダメですよ。琵琶湖なんか放射能まみれになっちゃうからね。戦争できない国だってことで認識しないと。そういう守ることを、喋るからね、向こうのペースに乗っかっちゃうんですよ。
　原発はある、食料は自給自足できない。資源がない。石油も、鉄鉱石もない。それだけでもう戦争のできない国なんです。だからやることは平和外交しかないんだよ。そこを全然マスコミのアホが言わないんだよ。そこをね、僕は、戦争なんてできないんだから、もう平和外交で、それこそ、中国へ行く、朝鮮へ行く、台湾へ行く、それをやっていく。しかも戦争って言うのは明らかじゃないか、パレスチナもそうだけどね。ロシア戦もね。両方とも犠牲になる。アホがやるのが戦争なんだと。そう言うね、世論の巻き返しが、全然できてない。ほんとにね、「攻めて来たら、どうする」
　それで大野のアホがね、大野知事ね、埼玉の。あのアホが、ミサイルの弾が飛んできたらどうするかって。小学校の平和教育で、彼らもいっしょに行ったんだけどね、ヘルメット被って守ればいいって。そういう戦争準備をしてる、アラートもそうですよ。あれ全部マスコミにシャットアウトさせちゃっているわけだからね。小学校の生徒に言ってる、万が一落っこたらヘルメット被ってたら助かるだって。そんなアホが、知事だけじゃなくて、校長も教育委員会もみんな言ってんです。じゃあ万が一落っこたら助かるのかって。答えない。ただ、万が一あったら困るからヘルメットかぶって訓練をやるんだ、それがね、大野知事が率先してやってる。僕ら教育委員会行ってもね、言わないんだよ。そんな常識わかんないのかって。万が一ったらそれで黙っちゃう、そういう日本人のね、今の知識水準ていうのかな、それがまさに戦争体制に組み込まれてる、そこは全然ダメだと思ってね。

●武野
知事だけじゃないけどね。
●T.I.
そうですよ、裁判官だってそうです。現実を知らないというか。
●武野
そうですよ、そこ。↗
●司会
今のお話しの中で、戦争できない国なんだって言うことを世論で巻き返すっていうのがひとつですね。我々がやることとして。
●T.I.
もちろんそうです。
●司会
だからそうしたところを、どうしたら良いのかと言うところを考えて行かなければならない。具体的なところから。
●S.Y.　三つの理由を挙げたでしょ。

●武野
　自画自賛みたいになるんだけれども、私は最近思うんだけれども、この反戦塾が最も、要するに、そういう戦争をさせない一番の良い手法だと思うんです。要するに 誰かに頼るんじゃなくて、自分たちが集まって、これだけの人数だと少ないかもしれないが。こういう様な集まりをあっちこっちに作っていったら、それは一つの大きな力になっていくんじゃないかって思うのです。そういうような世論喚起をして行くって言うことがやっぱり一番大事なんじゃないかって、壮意味ではね、今まではわりかし自分勝手に（笑）自分の思いみたいに話してたんだけども、それが急に自衛隊とかって言う難しいテーマをぽんとやっても、皆さんそれなりに意見を言っていただきますよね、そう言うようなのがたくさんできてくれば、それは一つの力になっていくんじゃないかなと思うんです。
　それとやっぱり、うちの父がそれを願ってたことだと思うんですけど、マスコミの、要するにジャーナリズムの再生ですよね。それが大事なことで、どうやったら、しかもマスコミ、ジャーナリズムは非常に弱ってますよね、売れない、見てくれないって。その時やっぱりこういうようなマスコミっていうのもやっぱり社会資本ていうのもおかしいですけど、私たちのために必要なものだっていう視点でやっぱり応援していかないといけないとそういうような思いを持ってます。ふと、私が関係している二つのことの自画自賛みたいな形になるんですけども、やっぱりこういうようなのが皆さんと 頑張ってお互いに 力を合わせてやっぱりこういう一つの、専門家が集まってどうこうって言うんじゃなくて、みんなと それぞれの知恵を出し合って話し合いするってそういうような集まりをもっともっとたくさん作っていくようなことで頑張っていければ一番いいんじゃないかなと思います。（～3：18：00）

●K.S.
　あの、むのたけじさんが出られた東京外語大で、外語大9条の会って言うのがあって、私もそこに卒業生だから関わっているんですけど、たまたま今日のテーマの自衛隊とそれから日米安保の現状みたいなものをどうなってて考えるべきかっていうテーマの講演会を 6月1日にやることになったもんですから、 チラシ持ってきましたんでよろしかったらおいてください というそういう宣伝です。(3：18：50)

●M.M.
　最初に口火を切られた、産業界が戦争の実は影の主役っていうようなそういう問題点をはっきり発言する人 、高岩仁さんて、映画作っててそれの基本だったんだけど、それを継ぐ人っていうのがいなくなっちゃったのかなと思ってたところ、心強いことを言ってくれたと。
　ひとつに先の大戦のきっかけって、満州に入ったつてもあの時に最大の、軍部が問題じゃなくて三井物産なんですよね。それが多くの人に認識されていないね。（認識されないような教育をやってきた）まさにそうなんですよね。その流れで、張作霖が爆殺されたって、あれ河本大佐が勝手にやったと言うことないけど、（シナリオ書いた男がいる。）証拠はないけど、イメージとしては。　（次ページへつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（8）

先だって桐島聡さんが東アジア反日何とかって言うので、最期に「俺だったよね」って言って「でも責任は取らないの」って。あの東アジア反日武装戦線って何を訴えたのかっていったら、実はまさにそこですよね。

朝鮮戦争でナパーム弾を17万発（？）あそこに打ち込んだんですよね。だけどそれはどこで作ったの、って言った時に日本で作っているわけですよね。日本の某企業。

ベトナム戦争のあの逃げていく、子どもが裸で逃げていく姿、あれ乱暴されたわけじゃなくて、近くにナパーム弾が落ち、近くにいたから、まとわりついて肌がやられちゃうから、だから裸になったんですよね。あの写真は多くの人が、9割以上の人が見てるかもしれないけれど、あれはナパーム弾のせいで、そのナパーム弾は日本から出荷してるじゃないか、そういうところまでの知識って全然フォローされてないですよね。

今回のことでも、日本の企業がイスラエルの企業と武器開発をしたり、そこにいきなりイスラエルに150億のお金を寄付して、ガザには15億って、それっておかしいんじゃないか、構造的に道なんだろうって。

みんなが気がつくって言うか、 できるような情報が伝わるように、それって民間でしかでしかできない、その重要な走りって言ったらむのたけじがやってたことだと思うんだけど、その兼ね合いで行くと あの知識っていうのがいかにこう欠けてる風土…。

で、その流れで行くと去年の8月18日にキャンプ・ デービットでバイデンと韓国の人と、岸田さんが３首脳会談で、 三つの文書を約束しましたよね。これって、軍事同盟でしょ。軍事同盟っていうことは何かあった時には、韓国で何かあった時は日本の軍隊、自衛隊、それは即そこに送りますっていう国の約束ですよね。国の約束って、この3者が、3つの国の代表者が約束したっていうことは日本の国内法の上に「こういうことをしますよ、自衛隊出しますよ」って約束してることだよね。日本は即軍隊を出さなきゃならない、この関係で言えば、即、米軍のこちらの極東の司令官がトップに立って韓国と日本の自衛隊の責任者が指示を受ける、それで動くと決めたことなんだけど、暴動になってもいいぐらい何ていう三国同盟のことでも、日独伊で約束した時にドイツからは日本って平気で約束破る国だなって言われたのは、ドイツがソビエトに戦争、独ソ戦始めたら、いわゆる三国同盟でドイツとも同盟結んでるから、当然、同盟国の意向に沿って、日本はソビエトとの約束を破棄して、戦争へ行くっていうのが、三国同盟の基本でしょ。同盟ってそういうことじゃないですか。だけど日ソの間で約束しているから行かなかったって、何とちゃらんぽらんな国だって。そう言うのが日本の国内では、ほとんどが話題にもならないって。それって 実はアメリカの軍部の多くはドイツ贔屓で、ナチス贔屓の人たちもいっぱいいるわけだから、米軍の中のナチスシンパの人たちを即、敵に回しているってそういう想像力も働かないということですよね。 知るって言うことがもっと拡がって、「戦争は反対だけど、軍事同盟を結んでるじゃないかって、これいいの」 っていう、私が思ったのは、そんなこともありました。（～3：26：48）

●H.I.

東松山市、埼玉県から来ました石井と申します。

自衛隊に対する印象について内閣府調査資料を6ページのを見させていただきました。 自衛隊の役割みたいな話も出ておりまして4番目の自衛隊の役割と活動について 6ページを見ますと、それとトップのところに「災害の時の 救援活動の緊急の患者輸送などの災害派遣」そのことが自衛隊の役割として期待するっていうのがトップで 88.3% 令和4年11月調べってですね、なってるんですこれはこれでわかるんですけれども現実的に考えておりますとですね、自衛隊法見ますとですね。自衛隊の役割っていうのは災害時の救援活動ではないんですね。あくまでも国家の防衛をその主たる任務とするということがきちっと明記されてるんです。こう言う集まりとか、九条の会の集まりなんかできますとですね、このアンケートに見られるような発言が多いようです。

つまり自衛隊の役割は災害援助隊にしたらいいんじゃないのと。軍隊の役割は、任務はもう憲法9条の絡みからいっても、小さくして、できるだけ小さくして 極端に言えば 災害援助隊に実質的なしたらいいんじゃないのってなことの発言が多いわけです。それは人情としてわかるんですけれども、僕が自衛隊の運動と関わってきた経緯を見ますとね、PAC3とか、自衛隊の基地、 伊藤さんとかそういうのに国民も関わってきた関係から行くとですね、現実的にはねとてもとてもじゃないけれども 自衛隊の主たる任務をその災害時の救援活動にそれを緩和するというようなことではなくて、その自衛隊法の役割の指針としてるのが画然としてあるわけです。それで僕はその集会なんかでよく小さく違いがあるんですと小さい声で発言するんですけどね。

災害救助隊って言うのは、別個にそういう省なり、そういう対策を国が設けるべきだ 、そして自衛隊という組織を縮小させたいんであるならば憲法9条にのっとって来られた方が資本の論理とか「日本は戦争ができない国 なんだ」とか言うような話がありますように、憲法9条をきちっと守る自衛隊に、それは我々が闘い取るべきだと。むのたけじさんの言うように、周辺国ともこの70年というところ、私たちは1人の自衛隊も殺されず、一人の他国の兵士も殺害することなくここまで何とかやってきたということをさらにきちっとした国際的な日本の9条というものを、国際的に認めさせられるようなそういう日本の外交 日本の国際的なメッセージというものを発信していく、そういう自衛隊に対する活動が必要である。

それから自衛隊の内部のことで言いますとですね、家族も隊員も日本国民として生活してるわけです。当たり前に。ですから分かりやすく言うと 自衛隊の中に労働組合を作って、勤務状態が労働法に違反してないかどうか、自分たちの自衛隊としての、隊員としての行為が憲法に違反してないかどうか、これは日本の憲法並びに法律を遵守するという誓約を取って自衛隊員に認可されてるわけです。ですから自衛隊員が自分の生命と生活の安全を守るためにはですね、憲法と法律を守る誓約通りに自分たちが獲得していくってことを自衛隊員と家族そしてそれを支援する私たち市民の力によって自衛隊の体質を変えていく。戦前における軍部の、変な因習という者を断ち切って新しい自衛隊として、新しい自衛隊の任務というものを私たちの手で作り出していく、そういう発想をもって、 自衛隊の役割について取り組んでいくべきでないか。

災害援助についても、災害が起こったときには原発の問題もありますし、どういう風なことで救援していくべきであるか、本当に情けない、緊急援助ができるかどうかもわからないような状態で予算ばっかり変なとこに使ってですね 、私たち、言うだけですね、 私たちの安全のところははっきり見えてこない。そういう風な感じです。

それから、一言だけ、理想的なことばっかり言うだけで、口だけじゃないかという声が聞こえてくるような気がするんで、一言だけ、僕の感じで行きますと、東松山九条の会って言うのが、ここで私たちは九条の会で動いてですね、憲法九条の碑というものを建立する会というのを作って、それを作ろうじゃないかと。そうすると市民の中から、ちょっと頭のいい人がですね、モニュメントとか、そんな碑を作っている場合じゃないんじゃないの、ガザ見たって、ウクライナ見たって、そんなモニュメント作っているところじゃないんじゃないのって言いますけれども。やはりこれにお金を出して、碑を作るのに対しては大勢の人が参加しなきゃならない。そこで僕は感じるわけです。

（次ページにつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（9）

非常に地道な、ちょっと見ると効果がなさそうだけれども、むのさんが新しいコミュニティを作ることが必要だってことを今日の資料でも言ってますよね。新しい人間関係バラバラになっちゃっている、私たちは引き裂かれている、だから新しい人間関係コミュニティを作る、それじゃそれを作りましょうと言ってもできない、こう言う具体的にお金を出して、運動して自分でも4人でも5人でも、その協働者を集めるという中において、憲法9条を平和の理念を共有するというささやかなコミュニティ作りの一環にもなるんではないか、こんな風に思ってですね、非常に地味だけど、石垣さんに言わせると、何やってるんだ、安保法制、東松山9条の会は安保法制のところに支援もしなかったし、すぐに参画もしなかったし、すぐに自分で＊＊送ってこなかったじゃないか、お前ちょっとボケてきたんじゃないか、なんて言われそうだけれども、そうじゃなくてですね、地道な活動の中で、そうした新しいコミュニティづくりは具体的にやっぱり作って行かなくてはならないと。資料がありますから、会が終わったらお渡ししますので。そういう運動のひとつが東松山にもあると言うことで。（～9：36：25）

●T.I.
　前田朗さんが、アフリカにも九条の碑があるって言ってたよな。
●H.I.
　日本にもいくつかあるんです。
●S,Y,
　今度、府中にも作りましたからね。府中で。
●T.I.
　おお、すばらしい。
●H.I.
　ただそういうものを作ると言うことだけでなくて、そういうものの背景にある、私たちのささやかな運動として、新しいコミュニティづくり、発想を転換させて、そして、9条を改憲させないような輪を4倍も、5倍も、10倍も大きく拡げていくというふうにやっていけばなと思ってます。（～9：37：00）

●司会
　今回の資料の中で、「希望は絶望のど真ん中に」の資料の中にも、人民公社の話から始まって、コミュニティを作るということが上がってますので、また、読んでいただければと思います。（～3：37：32）

●M.K.
　＊＊＊から来ました菊村です。
　今モニュメントの話が出ましたから、ついこの前、群馬の追悼碑が壊された問題は見過ごすことができないもので、ちゃんと追求しないといけないと思います。
●T.I.
　僕は行きましたよ。現地に。
●H.I　この「表現の自由市民ネットワーク」に神田さんが書いています。

●M.K.　それとあの、自衛隊のことといって、前の資料で、第2回の時に憲法学者の愛敬さん、その方が話されていることで、「これだけぜひ最後に申し上げておきたいのですが、アジアの軍隊で自国民に銃を向けたことのない軍事組織がどれだけあるかぜひ調べてみていただきたいと思います。中国は天安門事件、韓国は光州事件、ミャンマーもあります。自衛隊は自国民と向き合ってないんです。自国民に対して、銃を向けさせなかったのは、当時の市民の力であって、むのさんがいうように、憲法９条そのものが素晴らしいのではなくて、国民が守ってきたことがすばらしいのです。」と発言されてます。これは意外と大事なことじゃないかなと思います。　↗

　さっき、桐島さんの話がちょっと出たもんで、一言付け加えさせていただきますが、桐島さんは、東アジア武装戦線ですね、「さそり」というのに参加されたことがあるんですけど、無くなるほんの数日前にカミングアウトされて、そのことは救対（救援対策本部）は、すごい評価（？）して「見事に逃げ切った」と書かれています。それであの、桐島さんのニュースが出たときに、東アジア武装戦線が爆弾闘争でもって、9人の死者を出したということ、その時点では桐島さんは参加していないんですね。だからそのこととは全く関係ないのに、桐島さんのあれが出たときに、マスコミは盛んに爆弾事件のことを吹聴したと言うことを今のジャーナリズムがその辺のことをきちんと報道してないんじゃないかってことを救対の方からアピールしてました。
　あともうひとつは、なんて言うんですかね、さっき、あの、自衛隊を辞めるときにね、誓約書をとらせる、あれは予備役みたいなものと思うんですけど、つい最近見た「福田村事件」ですね、森さんの。あの中で活躍するというか、実際に虐殺をするのが、当時の在郷軍人なんですよね。つまりそういう在郷軍人というか、そういう形の人たちが、しっかりと地元に根を生やして、何かがあったときには「活躍」するんではないかというそういう恐れを思っています。（3：42：40）

司会
ちょっと補足します。さきほど、愛敬さんの話がありましたけど、それは 一昨年ですね、8月21日にこの「むのたけじ反戦塾」のプレイベントとしてやった時の話の書き起こしですね。（3：43：05）

●＊.T.
　初めて参加しました高宮と申します。
　ま、いろいろとお話を伺ってて、みなさん先達で、いろいろと教えてもらうこと多いなと思って聞いてました。
　僕自身が自衛隊のことについて、思うことは いくつかありまして、確かにウクライナの戦争が始まった時に、ウクライナの防衛だ、なんだかんだっていろいろ言ってましたけど、結局軍隊っていうのは殺戮と破壊しかできないものなんだなっていうのをつくづく思ったんですよ。プーチンの意向だとかいろいろなものがあるにしても軍隊の目的ってのは基本破壊と殺戮である。それは あの今ミサイルの話で石垣だとか、＊＊＊の基地などでも同じですけども、ミサイルを撃つ相手ってのは撃ったら相手を破壊するしかないわけですよね。殺すしかないわけですよね。けして平和を維持したり、何かを止めるためにやるわけではないっていうことだ、軍隊が自国民に銃を向けたことはないということを言われましたけども、戊辰戦争からずっと考えても、そこら中で市民を殺してるわけです。
　で、表に民衆と軍隊が真っ向からぶつかったっていう歴史を明治以降日本は持っていません。だからこそなかったのかなと。ただ司馬遼太郎さんが言うように、彼が宇都宮の戦車隊にいるときに、アメリカ軍が上陸して、そして市民が逃げてきた時にどうするんだと、もうそんなものはひき殺して行け、というふうに指令を受けていた、なんていう国の軍隊だと思ったと。ただそういう事態になれば、彼もそれをやったかもしれません。つまり基本的には軍隊は国民を守るためではなくて、いわゆる作戦を実行し、それを目的を果たすためだったらば殺戮と破壊をどう効率的にするかっていうことを考えての部隊だと思います。能登のことだとか、災害を自衛隊がメインに出るように出ているんですけども 自衛隊にしろ、国民の命を守るということで、警察とか自衛隊っていうのはよく子供たちに話し出ますけども、自衛隊も警察もことが起きてから、もしくは 本当に一種の災害が起きてからとなってますが、その前からずっと国民の命を本当に守ってるのは僕は消防署だと思っているんです。消防署って言うのは、明らかに人のいのちを救うためだけに動いています。

（次ページへつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（10）

ところが、消防署の役割に関して、ほとんどニュースが出しません。そして自衛隊が出てきたとき、軍隊の姿で出てきているあの姿をずっと見せてもうごまかしてるとしかニュース見てて思わないんですよ。何で、変な話ですかけど、人命救助の時に迷彩服がいるのか、と。いるわけないだろうって。連中がやってるのは、どんな場所でも軍隊を送ったり、そこに行って人を殺すのができるために、ああいう形でいろんな車両だとか設備を持ってるんであって、人を救うために設備を持っているんじゃないわけですよ。そんなことも考えればわかるのになあと個人的には思うんです。

自衛隊については、僕が小学校のときに、隣に自衛隊を行って辞めてきたお兄ちゃんがいたんですよ。そのお兄ちゃんが自衛隊で持った本だよって見せてくれた。それは「どうやったら人を殺すか」て言う本だった。それを観て寒気がした思いがあるんです。絵が描いてあって、相手の首のあごをあげさせて、そして残った手で、相手の首を切るんだっていうのがイラストで出ているんですよ。はぁー、と思って。まあ当たり前なんだけど自衛隊の人ってのは、殺しの訓練やってるんですよ。どうやったら相手を破壊し、殺せるかって、殺しの訓練をずっとやってて、それがここにある（手元）災害救助云々なんてゴマカシなんですよ。だからあたりまえのことなんですけど、殺しの訓練をやっている部隊に、それを毎日ずっと練習してる人間が、日本の平和を守るって、それ全然違うだろって個人的に思います。
じゃあ軍でなければ外交だろうってずっと昔から言ってましたけど、外交、外務省だとかあの辺のをやってる人の文章見ると、外交が基本騙し合いである、いかに相手を騙し、すかし、相手の隙を見てつけ込む それが外交だみたいな内容の文章、結構多いですよね。 何かとんでもない感じがしてるんじゃないかと。それこそは中世の話でしょ。戦国時代でもいいですよ。そういった論理を未だに持っているって言うのは、おかしいと思うし、僕は厚生省とか含めて、昔の内務省とかも含めて官僚組織が全然変わってないと言うことで基本的には国民を主役（主力？）にして考えるっていうのはハナからこの国にはなかったんだと思うんです。 自衛隊についてもどうやったら良いのかを考えるのは、まず、殺しの部隊だってことを認識し直すことじゃないかと思います。そんな感じて、聞いていて感じたことをバラバラ言いました。
（~3:50:10）

●S.N.　憲法を考える映画の会っていうのをやっている鍋島と申します。

そこが基本の話なんですけど、憲法9条をどう読んだら自衛隊を持つことが正当化できるのかっていうのは私の素朴な疑問です。で、あの自衛のためだったら軍備もっていいという理屈があるじゃないですか、だけど国際紛争を武力で解決しないって書いてあるんですよね、明確に。だから自衛隊は違憲なんでしょと私は思います。それをいろいろなんか理屈付けて自国を攻められる時だけだったらいいんだ、いうのが、いつの間にか集団的自衛権なんていうなんかあの変なものまで容認してしまって、まあこの辺りはもう全然理解できないなっていうところが私も思ってるとこです。

それで次に敵が攻めてきたら、武力で撃退しなければいけないと、そのため武力を持たなきゃいけないという議論があるじゃないですか。 それで今度のウクライナ 戦争であるとかまたガザ、イスラエルのパレスチナの問題であるとか、それで今まで＊＊＊だったような人たちがやっぱり武力も持たなきゃねみたいに改憲の方に動いているような気がするんですけども、じゃあその武力を持ったら敵が撃退できるのかって言う話ですよね。先ほど石垣さんがおっしゃったように、日本は戦争しちゃいけない国ですよね、それで日本を核攻撃するのに、核ミサイルさえいらないんですよ。電源切っちゃえば良いんですよ。『原発ホワイトアウト』（＊３）っていう本をご存じでしょうか。私あれを読んでぞっとしたんですけど、まだ読んでいらっしゃらない方もいると思いますが、あれその通りなんです。電源切っちゃえば良いんです。それこそ電源切ったって、放射能にまみれた国を誰がほしがりますか、っていうこと。だから武力で何とかできるって言うのはほんとにお花畑、歴史的に考えて、武力持ってて、敵を撃退してよかったねって、言う国っていくつあるんですか。今ウクライナ攻められてます。ロシアが侵攻したんですけど、ウクライナは武力持ってるからよかったね、て言う話になっているかというと、そうじゃないじゃないじゃないですか。

それで、私がそれで思いつくのは、真珠湾をやられたアメリカが反撃、あれ位かなと思うんですけど、もうそのアメリカと日本にはもうどう考えても日本は勝てないぐらいのも圧倒的な差があるわけですよね、人口の差もあるし、資源て言う差もあるし、これもどう逆立ちしても、勝てませんよ日本は。だから武力で敵を撃退するなんてことは、ほんとに幻想であって、日本はその戦争できないから、今朝、＊＊原発の集まりに行ってきたんですけど、そこで友達と話して、武力で攻められたら日本は無条件降伏しかないね、って話をしてたんですけど、一人の犠牲者も出さないでね、そういう風に私は思ってます。

それから あともう1つ、えっと自衛隊が今まで一人の犠牲者も出してないと言う話しありましたけど、イラクから帰ってき自衛隊、随分自殺者が出てるんですよね。それから南スーダンに行ったじゃないですか、帰ってきてますけど。あれだって南スーダンの現状を見たらあれは内戦ですよね。こんなところにＰＫＯはいられないって言う状況じゃないですか。それで、幸いにして一人も死ななかったかもしれないですけど、帰ってきて相当自殺者が出ているんじゃないかと私思ってます。自衛隊を研究している人にそれ聞いてみたんですけど、自衛隊はそういうこと発表しないのでわからないとおっしゃってましたね。私の考えていることはそんなことで、武装して、武力を持って撃退できるって、仮に撃退したとしますよ。でも自分の愛する人とか、いのちを失って、それで守ったものが、岸田政権だったらもう泣くに泣けない。（3：55：25）

●S.A.　今、電源が切れたら終わりだってところは、すごく納得します。

石垣さんがおっしゃってた「原発がこれだけたくさんあって、食料自給率も低くてちょっと停電があっただけで東京の都市機能がストップしてしまう、そんな国に戦争ができるのか」 っていうのは本当にそうだと思います。

一応あの思いついたことを申し上げますと、先程の自衛隊と違憲論については、そこはもっともだとは思うんですが、若い人たちに理解を広げていこうと思ったら、やっぱり自衛隊違憲論は持ち出したら無理だと思うんですね、現実問題として。自衛隊では無理かなと。それから憲法9条についても、変えさせちゃいけないって言うのは、それは当然だし、全く同感なんですけれど、ただ一方で憲法を守れば平和が守れる時代、前は、憲法裁判もってれば 守れるようなところがありましたけど、もう9条だけ守っても、実態はどんどんどんどん進んじゃってるんで、やっぱ それ以外のことをもっと手を出していかなきゃいけないんだろうなとは思います。集団的自衛権の行使が解禁されてから、これまで積み上げてきた諸々の何て言うんでしょう物が全部崩れ去ってしまって、集団的自衛権行使解禁前は例えばインドと訓練するとかオーストラリアと訓練するということもありえなかったですよね。オーストラリアぐらいは、ぎりぎりあり得たかもしれませんが、やっぱりあの集団的自衛権行使が認められるようになって、その他の国と一緒に戦うっていうことがあり得るということになって、もう何でも問題にならなくなってしまった、少なくとも国会では問題にならなくなってしまったと思うんで、非常に 9条は頼れない時代になってきたんで厳しいなというのが、1つ認識としてあります。

（次ページにつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（11）

それから自衛隊の、憲法9条を改正してその自衛隊を明記するんだというその自民党の改憲論について、まあ安倍晋三なんかは、昔、あの9条明記したって、それは何も変わらないんだみたいなことを言ってたかなと思うんですが、9条頼れなくなったとは言っても、9条があるから未だにできない事ってのはいっぱい残っていて、これ自衛隊を憲法に明記しちゃうと、そういった今できないことが全てやれるようになってしまうという意味で言うと9条明記っていうのは、単に今あるものを憲法上、書くだけで変わらないんだよなっていうのはそうじゃないんだっていうことをきっちり言っていかなきゃいけないんじゃないかって思ってます。

日本はそもそも戦争なんかできない国なんだっていうのに賛成した上でですね、そもそも日本がじゃあ攻撃される事態っていうのはどういう事態だったと。例えば北朝鮮がいきなり日本に攻め込んでくる、ミサイルいきなり打ち込んでくるなんてことはあるのありえないと、じゃあ中国がいきなり日本の本土に攻め込んでくるのか、ロシアが攻め込んでくるのか、これも普通に考えるとありえないですよね。ウクライナはやっぱり事情があって攻め込まれているわけで、ですからそうすると日本が攻撃される事態っていうのは、やっぱりアメリカが北朝鮮を攻撃したりとか、北朝鮮がアメリカが中国と戦争した時に初めて日本は在日米軍のある日本が攻撃の対象になってくるわけなんで、そういう意味で言えばそのアメリカとどんどん軍事的な連携を強めて、抑止力という名の元でこう、南西諸島にミサイル配備（？）をとかやってるけれども、結局それは、攻撃対象、中国や北朝鮮にとって攻撃対象を増やさせる日本がより攻撃される標的にされる可能性を高めてるだけなんだろうなという気がしてます。

それから、その関係で、先程「沖縄に関心が払われてない」十分関心が寄せられていないというお話があって、それはそれでその通りだと思います。ただ今回の、そのアメリカがオスプレイの飛行再開し始めて、それで自衛隊も、陸上自衛隊、まもなく21日からですかね、再開するって言う話でしたが、この前ニュース見てて思ったのは、沖縄の反対の動き、それから屋久島の人たちの懸念の声、それが出てたんですけれど、落ちた米軍のオスプレイって横田配備のオスプレイなんですよね。ということは、あれはたまたま屋久島沖で落ちましたけれど、横田基地の周辺、東京都内 どこでも落ちてもおかしくなかったわけで、あれは沖縄の問題じゃなくて、まさに東京都民の問題だったりとか、首都圏の問題なんですよね。首都圏の人たちにも関わる問題、そこのところが全然、指摘されてない、都民の反対の声とかそういうのがこう出てないっていう意味で言うと非常によろしくなくて、横田ってなんとなく東京都と頭では分かってても、なんとなく気持ちの上ではそうじゃないようなのが都民の多くにあると思うんですね。だけど実は東京都で、さっき言ったように、日本が攻撃されてくるとやっぱ一番先に攻撃されるのは沖縄じゃなくて、そこのところをみんな分かってないんじゃないか、それで攻撃されるときには、北朝鮮が日本に攻撃してくるときには、間違いなく核ミサイルでしょうから、横田を狙って撃ったものが、もしかしたら23区あたりに落ちるかもしれないわけですから、そういう危険もあるんだよってことを、若い人たちとの関係で言えば、言ってく必要があると思うんです。

それから先ほどおっしゃってた自衛隊は、軍隊は住民に銃を向けてきたんだって、銃を向けるものなんだっていうところまで言うと それもあると思いますし、もう1つは 自衛隊、軍隊は組織だったり、政権を守るための組織で、国を守るためには国民の犠牲は厭わないっていうことも強調していかなければならないんだと思います。

麻生太郎とかが平気であの「台湾有事は日本有事だ」みたいなことを台湾に行って言ってる。 あれなんかもう、じゃあアメリカは同盟国ですから、同盟国としていっしょに戦う、それはあり得るかなと思います、 頭の中で言えば。 同盟国であるだけではなくて、そもそも国交すらない国が攻撃された時に、日本が何で一緒に、国交すらない、国として認めてすらないところのために、じゃあ日本人が一緒に台湾、あの戦うんですかって、あのそこのところも非常にやっぱ大事、言ってく必要があると思うんですね。あなた、台湾のために自分が戦うんですか、と。日本が攻撃対象になってもいいんですかと、そこは強調しなきゃいけないんだと思うんです。

もう一つ 最後になります。そうなんだろうなと思いながらちょっとぎくっとしたこと。外語大の教授とちょっと電話で話した時に、日本は、要は台湾有事で巻き込まれちゃうんじゃないですかっていう質問を私がしたのに対して、「いや阿部君それはね、巻き込まれるんじゃないんだよ、もう日本は当事者なんだよ」と言われまして、もう当事者なんだよって。彼は防衛省出身の人なんですね。防衛省の人たちは、台湾、もうすでに日本は当事者なんだと思ってるんだなということがわかったっていうことをよく驚いたということを最後に終わらします。

●I.T.

ちょっと阿部さんの意見だけどさ、安倍元首相も台湾有事は日本の有事だったでしょ。それはものすごく、台湾の人を馬鹿にしている。植民地じゃないんだから、台湾は。そこの認識がないの、日本人の中で。台湾有事は日本の有事だっていうことは、台湾が日本の植民地だと思ってんだよ。 安倍なんか、麻生も。日本は関係ないんだよ、台湾の防衛はないしさ、依頼したって、全く関係ないじゃない。軍事同盟やってるわけじゃないんだから。そこの日本人の認識は。
それからこの間、沖縄のことも言ったんだよ。沖縄有事は日本の有事だって言ってるバカがいる。沖縄は沖縄県なんですよ。そう言ってんだから、国会前で。何言ってんだって。沖縄と日本が違うんじゃないんだ、沖縄県、日本人なんだからさ、沖縄有事は日本有事、攻められたら助けるなんてバカじゃないの。（それは誰が言ったの？）市民の人も言ってんだよ。沖縄差別はすごく日本人の中にあるの。「沖縄はしょうがない」、だからオスプレイのことだって言わないとくにそこがあるね。それがまだまだ世論、まだまだマスコミはだらしがないんじゃなくて、僕らの宣伝力がないんだけどさ。
（4：07：42）

●M.T..

大変活発な意見お聞かせいただいて有難うございました。私もこれからよく考えて行きたいと思います。資料に入れたんですけどね、自衛隊の施設は拡大して、強化されていると言うことで、石垣市や、うるま市や大分県の敷戸、大分県の敷戸は弾薬庫をつくると言うことで、これも数百メートルのところに住宅地があるからふざけんじゃないよって住民が反対しているんですけど、日本って山国で平地は30%なんですよね。その30%に1億2500万人が密集して住んでいて、そこに米軍基地はあるは、自衛隊の駐屯地はあるはとなると、どうしたって民有地と軍事基地がくっついちゃうんですね。これは、ここに書いたんですけど国際人道法で、軍民分離の法則って言うのがあるんですね。これは別に罰則もないし、努力目標なんですけど、やっぱり国際人道法に違反してるんじゃないのって言うのは、市民として率直な感想でね、皆さんその自衛隊について考えるとき、米軍基地も含めて、国際均等法のような考え方を援用しながら平和の知恵で考えていくことも大事なのかな、と思いました。(~4：09：00)
司会

まとめと言うことと、私の考えていることを話をさせていただきます。

前回の会でもすごく感じたんですけど、やっぱり 皆さんからこう話をネタが欲しいんですね 。私がまわりの人に話をしていくときにこんな話聞いたよ って言ってこんなこと知ってたっていうのを話していけるようなネタが欲しいと思って今日お聞きした中でもいくつか それ知らなかったらとかそういう言い方をすれば自衛隊 考え直してくれるんだな とかそういうのがすごくあったもんですから 前回同様 またあの 今回も書き起こしをしながらですね 話聞いてるうちはよくわかってないんですけれども 書き起こしてみるとそういうことかなっていう風なのが分かりますんで そういったことをできれば共有して皆さんが例えばこれから自衛隊のことを人に話すときあるいは 憲法のことを人に話す時にこうネタにしていただければなと思っております。

（次ページへつづく）

資料❺　第７回むのたけじ反戦塾（2024年3月20日）の記録　（12）

そういったことで今日はどうもありがとうございました。
　それと 私の個人的な意見ですけれども やっぱり今回、自衛隊のことについて話し合いたいっていうふうなことをテーマとして出したんですけれども かなり みんな 断片的な感じ方 意識になってるところがあるんじゃないかなと思うんですね 。
それは 例えば 反戦塾と名乗っても戦争っていうものに対してすごく いろんな側面 いろんなところで 皆さんが考えてて それが みんなどうやったら戦争をなくすことができるのか 戦争を止めることはできるのか 戦争をさせないことができるのか でも一言で戦争って言っても 本当 色んなこと考えてるわけですよね 人によって そこら辺のところで ちょっと自衛隊について今どういうことが自分の中で問題なんかっていうのを少し 整理してみてみることができないからって考えたんですね。
　で、後から配りました話し合いメモっていうの、 実は資料の2ページに書き足したんですけど、ほんとに思いつきですが、自衛隊に対して気になっている事っていうのはどういう風なことなのかって考えた時に全体で大きくは4つぐらいに分けられてですね。
　やっぱりあの今の軍拡の状況とか日米安保で軍拡が繰り広げられている、戦争をすることがめざされている中での危機感、自衛隊の問題っていうことを考えていかなきゃいけないぐらいか、本当に例えば岸田軍拡はどうなってんだ、何十兆円っていう話はどうなってんだって言っても、そのあるいは自衛隊のその中での具体的な例が具体的な役割っていうのはどういう風になっているかということもその時は聞くんですけれども、その後 すぐ忘れてしまう。 みんなで。で、あとはキチンと知ろうともしないで知ったつもりでいるみたいなところがすごく感じるんです。 だからそういったのを こう持続させていかなきゃいけないなっていうのとそれからこの間、土地規制法の話が出ましたけれども、そういったことによって あれは結局 米軍基地だけじゃなく、これからは自衛隊基地も私たちの敵になる、かたきになってくんだなっていうことを感じました。
　それが軍拡とか、日米安保の中で、自衛隊をどう考えていくか、っていうことだと思います。
　あとやっぱり一番って言いますか、不安に思う、嫌だなと思うのは、自衛隊と旧軍の、旧日本軍ですね、 ますます 旧日本軍にしていくような、この資料の中にも靖国参拝、自衛隊の集団参拝っていうのを書きましたが、 結局何のかんの言っても、この前の（反戦塾での）の発言の中でも、防衛大臣 なんですか、その人が自衛隊はこうあらねばならないという話も聞きましたけど、全然守られてないじゃないか、 何がそれを守ってないのかって言ったらやっぱり 自衛隊員が守ってないんじゃなくて、政治が守ってないんだ、政治が旧軍と同じものを作ろうと、（自衛隊を）旧日本軍のようにして、言うことを聞いて死んでいく人間、 死んでいく軍隊を作ろうとしているんじゃないかと思って、それはいったい自衛隊の中で、どのような教育がされているのかっていうことをもっと知りたいと思いますし、どういう風に教えられて「ひとを殺せ」って教えられているのかって言うことも、私たち全然知ろうとしないですよね。そんなこと知りたくない、だけど自衛隊は無くした方がよい、っていってるわけですよね。何かそのあたりも、もう少し知ることが大切なんじゃないかなと、思いました。
　それと思うのは、自衛隊の情報の閉鎖性ですね、外に漏らさない、12人が亡くなった軍用機が1年たってようやく「原因不明」って言う結論が出たみたいな話があって、これは旧軍だって同じですよね、世界中の軍隊どこだって同じだと思うんです、閉鎖性って言うのは、いわゆる軍機を守らなくてはいけないとか、軍に対して軍の作戦に~~に~~対して不利なことは 外に漏らしてはいけない、そういう内容において、言論の自由や表現の自由を抑えていく、自衛隊って言うことも、もともと軍隊として持っている問題があるんじゃないかっていうところを感じました。
　それから3番目としてやっぱり報道とかジャーナリストの問題、先程あれは宣伝させられているんだっていうこと、あるいは、そういう風に考えなくさせているんだっていうこと。
　例えば私はテレビ局によって随分自衛隊の取りあげ方と言うことが違ってきているというのを感じるんですけど、中には本当にあの最近はお笑い芸人がフジテレビあたりでよく出てくるんですけど、「 親しまれる 自衛隊」、 先ほどありました地震と言えば、必ず自衛隊が出てきて、ていう風なことを宣伝に使っている、すごく感じますし、そういった形でマスコミも利用した戦略っていうのに、 そのまま何も感じないでいる そういう風な世代がこうおだってきている、育ってきているじゃなくて、すでに大半を占めているんじゃないかと思います。
　ジャーナリズムはもうちょっと、きちんとフォローして粘り強く追いかけていくっていうことがしてくれないかなと思っています。
　それから最期なんですけど、若い人たちの意識って言うのがどういう風になっているのか、 それも今日のむのさんの話にもありましたんが、やっぱり若い人と直接話してみれば、ずいぶんしっかりした考え方を持っている、一概に若い人だからって、若い人っていう決めつけ方みたいなの、すごく私はよくないなと思って、どうしてあなたはそういう風な考えなのって言って、それはどういう風なことからそう思ったのっていうこと、そういったことをきちんと話していけるような、もっと私たちの材料として欲しいな と思っています。
　ちょっと最近びっくりしたのが、松本さんっていう監督がこの間横浜で、高校生の会話を聞いてて、横浜の県立高校だったんだけれども、県立高校で修学旅行前の事前授業って映画を見せられる、「あれ嫌だな」って話を聞いていて、「それ何の映画？」って言ったら修学旅行 先が知覧で、事前授業に、事前学習に使われてが『俺は君のために死にに行く』っていう石原慎太郎、製作総指揮の映画。県立高校ですよ。でも私たちそういったことが学校で行われてる、都立もそうかもしれません。分かりません。今高校生たちが、修学旅行に行って何を教えられているか、全然そういったことに対して無知ですよね、知らないですよね、知らせられない、なにかそういう形で先ほどの簡単に言えば右傾化っていうか、 簡単に言えば旧軍化っていうか、そういったのが自衛隊の中でも外でも若い人たちの中でもこう続けられる、 もっともっとそういったことを、私たちは単に「若い者は」っていう風なこと言ってるんじゃなくて 知らせなきゃいけないんじゃないか何が行われているかってことを知らなきゃいけないんじゃないかということと、この（反戦塾の）何回か前にやっぱり身近な人にこう話していくことが第一歩だっていう話がありましたけれども、そういったことで今日聞いたような話でも、こんなことがある、 こんなことがあった、こんなこと知らないでしょっていうことをどんどん出してもらってですね、 私はせっせとそれを記録してきますんで、それをまた共有して、あるいはこれをもっと発信してですね、より多くの人に伝えていけるようなそういう風な会を続けていきたいなと思っています。 だからこれは実は PDF の形で今 ダウンロードできたりとかメール 私はあの 900件ぐらいにこう映画の会の案内で出してんですけれどもそこにあの添付してますんで、そうすると全然 今までそんなこと話したこともないような 京都の宇治の人がですね 自分の近くにも 自衛隊基地あるんだけれども何となく住民まわりでは、嫌だなあと言うことを言っているとか、この中に書いてあった土田さんの文章を読んで、本当に軍縮を進めることが第一歩だっていう、自衛隊は単に国を守る働きじゃなくて、自衛隊をなくして、本当に戦争をなくすと言う報告に行かなきゃいけないというメールをいただいたんですけど、そういった形でできるだけ広げていきたいと思います。（～4：20：50）

資料❻　「むのたけじ反戦塾」これまで

2022年3月21日（休）
むのたけじ 地域・民衆ジャーナリズム賞 受賞の集いプレ・イベント「映像とお話の会」
■参考映像『**むのたけじ100歳の不屈 伝統のジャーナリスト次世代への伝言**』
■**お話：今に生きる『たいまつ』の姿勢と思想　佐高信さん**

2022年8月21日（日）
戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ―むのたけじと考える憲法
- **番組上映『まだ101歳むのたけじ―戦争を殺す日まで』**
- **「いま戦争と改憲の危機に私達は何をどのように闘うか」佐高信さん 中垣克久さん 愛敬浩二さん 阿部美砂さん**

2022年10月10日（休）
「むのたけじ反戦塾」設立準備会
- **『笑う101歳×2 笹本恒子 むのたけじ』上映**
- **河邑厚徳 監督のお話**

2022年12月18日（日）
第1回むのたけじ反戦塾
❶ むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に**』
❷ 参考映像『**NHKスペシャル「日本人はなぜ戦争に向かったのか」**

2023年3月12日（日）
第2回むのたけじ反戦塾
❶ 自己紹介（それぞれの考えを出し合う）
❷ むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に**』第1章「**現在を刺す七〇〇万年の歩み**」から
❸ 参考映像　『**100歳、叫ぶ 元従軍記者の戦争反対**』

2023年7月6日（木）
第3回むのたけじ反戦塾
❶ 自己紹介（私の考え）＋むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に**』第2章「農耕の中からなにゆえ戦争が」前半
❷ 参考映像『**100年インタビュー　ジャーナリスト むのたけじ**』前半

2023年8月26日（土）
第4回むのたけじ反戦塾
❶ 参考映像『**100年インタビュー　ジャーナリスト むのたけじ**』後半
❷ **むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』**
❸ **それぞれが今考えていることの出し合い・話しあい**

2023年11月23日（木･祝）
第5回むのたけじ反戦塾
❶ 参考映像**「むのたけじ100歳のつどい『ジャーナリズム・メディアの再生～戦後70年・未来への課題』**（66分）2015年4月制作
❷ **参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合い**
❸ **むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』第三章「人類の余命は四〇億年か、四〇年か」から**
❹ **「むのたけじ反戦塾」の新しい展開をめざして**

2024年1月20日（土）
第6回むのたけじ反戦塾
❶ 参考上映：秋田県立秋田明徳館高等学校PTA主催特別企画**「99歳のジャーナリストむのたけじ先生講演会『若い人達に伝えたいこと』**（108分）講演：2014年3月10日
❷ むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に**』**第4章「みんなの課題にみんなで取り組む」**前半 P.123~143
❸ 参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合う

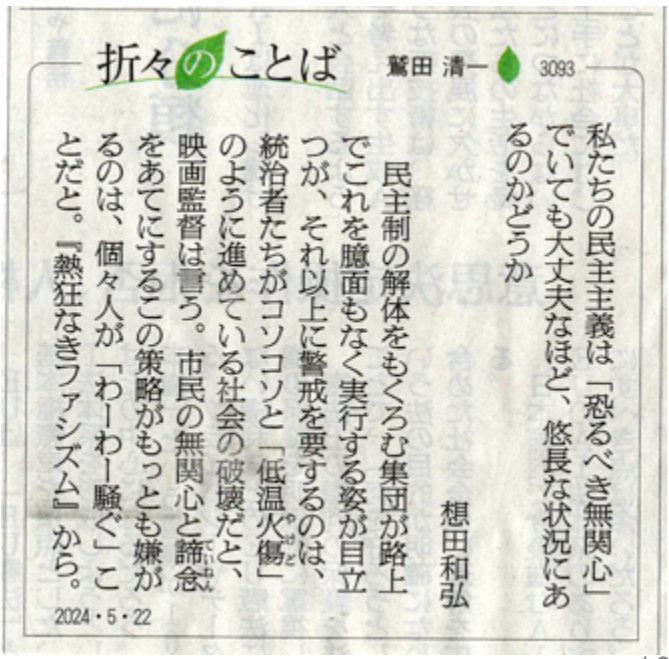
2024年３月20日（水･休）
第6回むのたけじ反戦塾
❶ 参考上映：秋田県立秋田明徳館高等学校PTA主催特別企画**「99歳のジャーナリストむのたけじ先生講演会『若い人達に伝えたいこと』**（108分）講演：2014年3月10日
❷ 話し合いテーマ「**自衛隊についてみんなで考える**」
❸ むのたけじ著『**戦争いらぬ やらぬ世へ**』**「自衛隊派遣の是非について」後半** P144~155
❹ むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に**』**第4章「みんなの課題にみんなで取り組む」後半** P144~155
❺ 参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合う

資料❼　次回「むのたけじ反戦塾」のご案内

第9回「むのたけじ反戦塾」は8月17日（土）の開催です。

日時：2024年8月17日（土）13時半～16時半
会場：文京区民センター２A 会議室

8月21日はむのたけじさんの命日でもあります。
亡くなって8年目になります。
次回は、同じ文京区民センターですが、少し大きめの会場を用意しました。
より多くの人に呼びかけていけるように、今まで参加いただいたみなさんと、魅力的なプログラムを考えて行きたいと思います。ご意見をお寄せください。


折々のことば　鷲田 清一　3093

私たちの民主主義は「恐るべき無関心」でいても大丈夫なほど、悠長な状況にあるのかどうか

想田和弘

民主制の解体をもくろむ集団が路上でこれを臆面もなく実行する姿が目立つが、それ以上に警戒を要するのは、統治者たちがコソコソと「低温火傷」のように進めている社会の破壊だと、映画監督は言う。市民の無関心と諦念をあてにするこの策略がもっとも嫌がるのは、個々人が「わーわー騒ぐ」ことだと。『熱狂なきファシズム』から。

2024・5・22

資料❽　憲法を考える映画の会からのご案内

第76回 憲法を考える映画の会

THE ATOMIC CAFE

アトミック・カフェ

2024年6月29日（土）
13時30分～16時30分
文京区民センター 3A会議室
（地下鉄 春日駅 2分・後楽園駅 5分）

プログラム
13：30～13：40　この映画の背景について
13：45～15：15　映画『アトミック・カフェ』上映
15：25～16：30　トークシェア

参加費：一般　1000円　学生・若者　無料

（当日、会場でお支払いください。予約不要でどなたでも参加できます）

今回の映画を見て考えていきたいこと

この映画は原爆を描く映画というより、原爆への啓蒙を目的とした映画を材料に、政府、軍のプロパガンダについて考えて行く映画といえます。

原爆開発当時、政府や軍がどのように意図的に、原爆の被害を軽く印象づけたいとするプロパガンダをまき散らしていたかが浮かび上がってきます。

その情報は軍や政治が都合よく、都合の悪いものは隠して、科学的な根拠も何もなく、国民の安全や健康など二の次で核開発競争を第一に動いていたかがよくわかります。国家や軍は国民の生命を守らない、政権を守るためには平気で国民の生命をも犠牲にすると言うことがわかります。

しかし、この70年前のアメリカの姿を笑う材料ではなく、今でも、わが国では、同じようなおかしい、愚かしい政策が粛々と大まじめに行われていることを知ると、慄然とします。

北朝鮮の弾道ミサイルの飛来への「注意」を呼びかけるJアラート。沖縄や東京、埼玉でも行われた市民、学校の避難訓練。誰もがそんなことは無いだろうとタカをくくっていても、それが職場の決まりとなれば、おかしいとも、疑問を投げかけることもせずに黙々と従う。その異常さに背筋が寒くなっていきます。とくに戦争になる危険を煽る目的で学校で行われた「避難訓練」。小学生に逃げて、隠れることを指導しても、どうすれば良いのか具体的には何も言っていません。埼玉では「ミサイルが飛んできたらどうすれば良いか？」の質問に「ヘルメットを被っていたら助かる」と教え、知事は「万が一あったら困るから、ヘルメットかぶって訓練をやるんだ」と答えたそうです。

そんなあやふやな話に、県知事以下、役人が、教育委員会が校長や教員が黙々と従っていること、どこか寒々としてものが感じられ、本土決戦を前に竹槍で、一人一殺を教え込まれた80年前の女性や子どもの哀れさを感じると同様に、いまもこうした教育を受けている子どもが哀れさです。

大人たちはミサイルの飛来を避難すれば安全とほんとに考えているのか、危機を煽る煽動宣伝だとわかっていながら仕方なく従っている教員。自分で考えてもおかしいと思うことをまるで踏み絵のように強要される、それに反対もしない、抵抗もしない、まさに教育の現場が今そういう理不尽な状況であることを見せつけられます。

『アトミック・カフェ』

放射能バッチを付け、爆心地へ送り込まれるアメリカ兵たち。まるで実験動物のような彼らに対して上官は“爆風や熱に比べれば放射能に心配はない”と告げる。

かわいいカメのバート君が登場する教育アニメーションでは、原子爆弾が爆発したときの対処法を子どもたちに分かりやすく説明してくれる。バート君曰く“ピカッと光ったら、すぐに頭を隠すこと…。”

作品はこうした原爆に対する啓蒙を目的にしたフィルム素材だけを用い、ナレーションを排して巧みな編集でつないだ映像のみで、大衆プロパガンダの恐怖を浮かび上がらせていく。

米ソの原爆製造競争が激しかった当時、アメリカ政府は国民を安心させるために原爆ＰＲ用フィルムを製作した。原爆がいかに安全であるか、害のないものであるかをまじめに説いたこの映画は政府や軍部が国民に歴史上に残る嘘をついたことを実証するものであった。

（1982年制作／89分／ケビン・ラファティ　ジェーン・ローダー　ピアーズ・ラファティ監督作品／アメリカ映画／ドキュメンタリー）

憲法を考える映画の会
〒185-0024 東京都国分寺市新町3-5-6-303
携帯番号：mail：hanasaki33@me.com
TEL：042-406-0502
http://kenpou-eiga.com/?p=2928

第76回憲法を考える映画の会のご案内をさせていただきます。

日時：2024年6月29日(土) 13時30分～16時30分
会場：文京区民センター 3A会議室　（春日駅2分・後楽園駅5分)
プログラム 13:30～～13:40　　この映画の背景について
13:45～～15:15　　映画『アトミック・カフェ』（89分）
上映 15:25～～16:30　　トークシェア

映画『アトミック･カフェ』（原題：THE ATOMIC CAFE）

【作品の解説】

放射能バッチを付け、爆心地へ送り込まれるアメリカ兵たち。まるで実験動物のような彼らに対して上官は“爆風や熱に比べれば放射能に心配はない”と告げる。

かわいいカメのバート君が登場する教育アニメーションでは、原子爆弾が爆発したときの対処法を子どもたちに分かりやすく説明してくれる。バート君曰く“ピカッと光ったら、すぐに頭を隠すこと…。”

作品はこうした原爆に対する啓蒙を目的にしたフィルム素材だけを用い、ナレーションを排して巧みな編集でつないだ映像のみで、大衆プロパガンダの恐怖を浮かび上がらせていく。

米ソの原爆製造競争が激しかった当時、アメリカ政府は国民を安心させるために原爆ＰＲ用フィルムを製作した。原爆がいかに安全であるか、害のないものであるかをまじめに説いたこの映画は政府や軍部が国民に歴史上に残る嘘をついたことを実証するものであったが、この作品はこれをさらに編集し、ドキュメンタリーの要素を持つシニカルなパロディー映画にした。（映画.Com 『アトミック･カフェ』ほか）

この映画は映像のほとんどの部分を、アメリカ軍の広報映画や教育映画、原爆にどう対応するかを啓発するラジオ番組、テレビ番組を使って構成しています。　当時の核の「真実」を伝える報道と、それを受け入れていた時代の空気を巧みにまとめ、作り手自身が伝えたい皮肉を込めたメッセージに作り替えています。

そうして、原爆開発当時、政府や軍がどのように意図的に、原爆の被害を軽く印象づけたいとするプロパガンダをまき散らしていたかが浮かび上がってきます。

その情報は軍や政治が都合よく、都合の悪いものは隠して、科学的な根拠も何もなく、国民の安全や健康など二の次で核開発競争を第一に動いていたかがよくわかります。国家や軍は国民の生命を守らない、政権を守るためには平気で国民の生命をも犠牲にすると言うことがわかります。

なかでも「原爆が落とされそうになったらどうすれば良いか？」の解答にはあきれかえります。DIYで庭に小屋を作るかのようにシェルターを作ること呼びかけます。避難訓練はとにかく頭を隠せばよいと「教育」している様は、可笑しさと愚かしさに満ちています。

しかし、この70年前のアメリカの姿を笑う材料ではなく、今でも、わが国では、同じようなおかしい、愚かしい政策が粛々と大まじめに行われていることを知ると慄然とします。

北朝鮮の弾道ミサイルの飛来への「注意」を呼びかけるJアラート。沖縄や東京、埼玉でも行われた市民、学校の避難訓練。誰もがそんなことは無いだろうとタカをくくっていても、それが職場の決まりとなれば、おかしいとも、疑問を投げかけることもせずに黙々と従う。その異常さに背筋が寒くなっていきます。とくに戦争になる危険を煽る目的で学校で行われた「避難訓練」。小学生に逃げて、隠れることを指導しても、どうすれば良いのか具体的には何も言っていません。埼玉では「ミサイルが飛んできたらどうすれば良いか？」の質問に「ヘルメットを被っていたら助かる」と教え、知事は「万が一あったら困るから、ヘルメットかぶって訓練をやるんだ」と答えたそうです。

そんなあやふやな話に、県知事以下、役人が、教育委員会が校長や教員が黙々と従っていること、どこか寒々としてものが感じられ、本土決戦を前に竹槍で、一人一殺を教え込まれた80年前の女性や子どもの哀れさを感じると同様に、いまもこうした教育を受けている子どもが哀れさです。

大人たちはミサイルの飛来を避難すれば安全とほんとに考えているのか、危機を煽る煽動宣伝だとわかっていながら仕方なく従っている教員。自分で考えてもおかしいと思うことをまるで踏み絵のように強要される、それに反対もしない、抵抗もしない、まさに教育の現場が今そういう理不尽な状況であることを見せつけられます。

映画は、アメリカがちょうど反共産主義の「赤狩り」が燃え上がった時期に重なります。そうした啓発宣伝がラジオ・テレビ番組などによって活発に、繰り返し行われていました。

今の日本ではマスメディアも、例えば「Jアラート」が発せられると、全局通常放送を止めて、その報道に従わなければならないと言うことを強要されています。いつの間にそんな決まりができたのか、まさに改憲の眼目である「緊急事態条項」を先取りし、どんなことでも有無を言わさず従わせる権力をやりたい放題、都合の良い意識の浸透、洗脳に努めているかのようです。

冷戦、赤狩り、反共プロパガンダ。いま、この国で「中国が攻めてくる」、「北朝鮮からミサイルが飛んでくる」と煽り、その備えのために軍備を拡張しなければという宣伝に利用している政権、自治体。80年前のアメリカを包んだ可笑しさ、恐ろしさがこの国にも起こりうる、すでに着々と進められていることをこの映画は教えてくれます。

（法学館憲法研究所「シネマde憲法」より一部転載）

資料❾　憲法を考える映画のリストのご案内

　新しい「憲法を考える映画のリスト」2024年版」が完成しました。できるだけ多くの人が自主上映会をできるような手の届く作品を選んでいます。
　新しく付け加えた映画は以下に挙げるような71作品。全部で168作品、68ページのリストになります。

憲法を考える映画
（憲法ができるまで）
『しではら かどま市が生んだ日本の総理』
（憲法を平和に活かす）
『荒野に希望の灯をともす 医師中村哲 現地活動35年の軌跡』
『医師 中村哲の仕事・働くということ』
（人権をめぐって）
『生きるのに理由はいるの？ 津久井やまゆり事件が問いかけたものは…』
（人権をめぐって）
『ワタシタチハニンゲンダ！』『海辺の彼女たち』
『東京クルド』
（国家と教育）
『教育と愛国』『子どもたちの昭和史』『君が代不起立』
『プリズンサークル』
（国家とは？）
『日の丸 寺山修司40年目の挑発』『REVOLUTION＋1』
（弾圧に耐えて）
『福田村事件』
（戦争の中で）
『失われた時の中で』『娘は戦場で生まれた』

民主主義を考える映画
（自由と民主主義のために）
『ヤジと民主主義 劇場公開版』
『バークレー 市民がつくる町』
『パブリック 図書館の奇跡』
（自由と権利を守る）
『グレタ ひとりぼっちの挑戦』
『悠久よりの愛 脱ダム新時代』『食の安全を守る人々』
（基地との闘い）
『日本原 牛と人と大地』
『矢臼別物語 北の大地からのメッセージ』
（安保との闘い）
『怒りをうたえ』『1969新宿西口地下広場』
『戦車闘争』『狼をさがして』『きみが死んだあとで』
『三里塚に生きる』『三里塚のイカロス』
（働く人々の権利と闘い）
『作兵衛さんと日本を掘る』
『ここから「関西生コン事件」と私たち』
『日本人オザワ』
『オキュパイシャンティ インドカレー店物語』
（政治をわれらに）
『2887 アベ政治を記憶する』『パンケーキを毒味する』
『妖怪の孫』『国葬の日』『シン・ちむどんどん』
『なぜ君は総理大臣になれないのか』
（ジャーナリストの闘い）
『ジャーナリズム・メディアの再生 戦後70年・未来への課題』『標的』『燃え上がる記者たち』
『コレクティブ　国家の嘘』
『命(ぬち)かじり 森口豁 沖縄と生きる』『裸のムラ』
『はりぼて』『テレビで見れない芸人』『新聞記者』

戦争を考える映画
（戦争をつくるもの）
『戦争のつくりかた』『21世紀の資本』
（日本軍の犯罪）
『日本鬼子』
（戦争が残したもの）
『カウラは忘れない』
『オキナワサントス』
『いまはむかし 父・ジャワ・幻のフィルム』
『記憶の戦争』
『ガラスのうさぎ』
『対馬丸 さようなら沖縄』
『うしろの正面だあれ』
（戦争に巻き込まれる）
『傍観者あるいは偶然のテロリスト』
（戦争に行かされる）
『ジョニーは戦場へ行った』
（沖縄の戦いと闘い）
『戦雲』
『ミサイル基地がやってくる 若きハルサーたちの唄』
『ミサイル基地がやってきた 島で生きる』
『サンマデモクラシー』
『水どぅ宝』

核を考える映画
（原爆から考える）
『長崎の郵便配達』
『TOMORROW 明日』
『太陽が落ちた日』
（核実験から考える）
『サイレント・フォールアウト 乳歯が語る大陸汚染』

＊**「憲法を考える映画のリスト2024年版」**ご希望の方は、「憲法を考える映画の会」まで、ご住所、電話番号またはメールアドレスをお送りください。
映画祭、上映会の会場でも販売しています
＊1部500円（＋郵送の場合送料250円）

＊郵便振替：憲法を考える映画の会
口座番号：00170-2-729555
「リスト2024年版」をお送りするときに「振替払込取り扱い票」を同封しますが、郵送で1000円を送っていただいても結構です。（その場合、残りの250円は「憲法を考える映画の会」案内郵送料のカンパとさせていただきます。

資料⑩「希望は絶望のど真ん中に」結章 足元から世界を耕す （前半） ⑹

い。日本、朝鮮、中国の青少年が先駆けして、世界じゅうの青少年が働き出して、「世界連合」が中国の地上で産声をあげる日がきっと来る。中国の人々よ、そういう事態の訪れを予期し願望したから、あなた方は国の名に「世界の中心の華」という中華の二字を冠としたのでありませんか。その日の来る前に、二つのことを出来るだけ早く実現して下さい。私ごとき者が言わなくとも、あなた方自身で実行なさるに決まっていますが、加勢する意味で敢えて私は言います。

私は中国に人口と面積だけでなく、何よりも心の働きの大きな、おおらかな国になってほしい。それが中国の天地に最もふさわしい姿ですな。そのために一党独裁の解消です。西欧流の間接デモクラシーのくたびれて腐った政治方式への移転なんかではない。まだどこでもやっていない直接デモクラシーの、人民が真に主人公である直接デモクラシーの実現へ進んでほしい。

もう一つ、少数民族の問題です。五五の少数民族が中国の全人口の六%ということですね。その人たちに一〇〇%でなく一五〇%の行動の自由を保障し、その営みの中で新しい連合体を組むべきではありませんか。この改革を中国は必ずやれますね。魯迅さん

が亡くなった時に、葬列の先頭に「民族魂」と大書した旗を立てたその民族ですから。

幼な子たちと一対一の付き合いを

中国を訪ねた時に「老壮青の三結合」という合言葉が社会運動として強調されるのを見て、自分たちの国ではどうか、と思慮した。日本では「夫婦円満」「親子仲よく」とか「兄弟は力を合わせて」などとよく言うけれど、世代間の結束や協力を勧めた言葉は私の頭に思い浮かばなかった。それだけに「老壮青の三結合」に心をひかれ、敬意を覚えた。と同時に「何かおかしい、何かが欠けている」気がした。しかし、その思いを深めることはしなかった。その時の私は六三歳でした。

その後いろんな学習会で、中国の合言葉を引き合いに出して学び合うことがあった。そして八〇歳代の半ばに、私の脳裏に突然「幼少青壮老の五結合」という一句が稲妻のように走った。人間みんなの協力を各世代の角度から考えるなら、幼を先頭に老に至る五世代をみな一対一の重さで結び合わせねばならぬ、という考えが私の内部に生まれた。生まれさせたものは自己反省だ。私は父親として大事な所で落第していた。

＊24ページから19ページに遡る形で、後ろから左開き上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

〈Memo〉

むのたけじ反戦塾
〒338−0006　さいたま市中央区八王子
4-7-10-201
(問合せ先)TEL:090−4599−5314
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

＊24ページから19ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

んかいりませんね。

ペンを動かしながら「おれはやっぱりアジア人だな」と思ったら、おかしなことが起こった。思いを乗せてペンを動かすのだが、今度は動くペンが思いを誘い出して、想念がもつれ合った。その中の二つを紹介して、この文章を結ぼう。

私が自分を「アズ・エイシアン＝アジア人として」と言ったのは、これまで一回切りです。夫婦でアメリカを旅して、あす日本に帰るという日でした。ロサンゼルス市で、ばかでかい大衆食堂へ昼食をしに入った。客でごった返していて、気分はよくなかった。そこへ来たテーブル係のむすめさんの、これまた何と素敵なことよ。小柄で、お化粧なしで、お仕着せの仕事着で外見は平凡だが、全身から清潔そのものの香気が発散している印象でした。「どこから？」という問いに、ソウルからアメリカの大学に学びに来て二年目、と言った。私ども夫婦を見て、母国の自分の家族を思い出したのであるまいか。何度もテーブルにやって来て、話を交わした。彼女の専攻は何と政治学で、三年後に帰国すると言っていた。食堂を去る時に、私が「アジア人としてお互いにアジアの未来のために頑張ろう」と言ったら、ニッコリ笑って手を差し出したので、強く握りかえした。

この文章を書いていたら、あの韓国の娘さんを思い出し、「アジアの未来のために」という一語が私のハートを中国に運んだ。

中国への二度の旅で見聞した体験を、その後ずっと折に触れて回想して噛みしめて来た。そして思ったことがある。世界のあちこちで戦争があったが、大昔から最近に至るまで、中国の大地ほど戦乱による血と涙を多く受けとめた大地は、他にはないのではあるまいか。中国には、今日以後どのような戦争も起こらない。大地が起こさせないのではあるまいか。そうだ、中国の大地は、そこで戦争をやろうとする者、戦争を運んでくる者すべてを大地の力で吹き飛ばして、永久平和の地と自己主張していくに違いない。と思ったら、私の想念は「そうだとしたら、『世界連合』の設置は中国の大地の上だ」という内心の叫びに転化した。

ニューヨークの国際連合の建物を見学したが、何とも味気なくて貧しい印象でしたな。国連の組織そのものが役立たずの貧困を増す一方ですから、そのうち自滅するだろう。代わって、常任理事国なんていう不当な特権を全く除いた新しい「世界連合」がきっと結成される。そう固く私は予見している。その場所は、中国の大地こそが最もふさわし

い。日本、朝鮮、中国の青少年が先駆けして、世界じゅうの青少年が働き出して、「世界連合」が中国の地上で産声をあげる日がきっと来る。中国の人々よ、そういう事態の訪れを予期し願望したから、あなた方は国の名に「世界の中心の華」という中華の二字を冠としたのでありませんか。その日の来る前に、二つのことを出来るだけ早く実現して下さい。私ごとき者が言わなくとも、あなた方自身で実行なさるに決まっていますが、加勢する意味で敢えて私は言います。

私は中国に人口と面積だけでなく、何よりも心の働きの大きな、おおらかな国になってほしい。それが中国の天地に最もふさわしい姿ですな。そのために一党独裁の解消です。西欧流の間接デモクラシーのくたびれて腐った政治方式への移転なんかではない。まだどこでもやっていない直接デモクラシーの、人民が真に主人公である直接デモクラシーの実現へ進んでほしい。

もう一つ、少数民族の問題です。五五の少数民族が中国の全人口の六％ということですね。その人たちに一〇〇％でなく一五〇％の行動の自由を保障し、その営みの中で新しい連合体を組むべきではありませんか。この改革を中国は必ずやれますね。魯迅さん

が亡くなった時に、葬列の先頭に「民族魂」と大書した旗を立てたその民族ですから。

幼な子たちと一対一の付き合いを

中国を訪ねた時に「老壮青の三結合」という合言葉が社会運動として強調されるのを見て、自分たちの国ではどうか、と思慮した。日本では「夫婦円満」「親子仲よく」とか「兄弟は力を合わせて」などとよく言うけれど、世代間の結束や協力を勧めた言葉は私の頭に思い浮かばなかった。それだけに「老壮青の三結合」に心をひかれ、敬意を覚えた。と同時に「何かおかしい、何かが欠けている」気がした。しかし、その思いを深めることはしなかった。その時の私は六三歳でした。

その後いろんな学習会で、中国の合言葉を引き合いに出して学び合うことがあった。そして八〇歳代の半ばに、私の脳裏に突然「幼少青壮老の五結合」という一句が稲妻のように走った。人間みんなの協力を各世代の角度から考えるなら、幼を先頭に老に至る五世代をみな一対一の重さで結び合わせねばならぬ、という考えが私の内部に生まれた。生まれさせたものは自己反省だ。私は父親として大事な所で落第していた。

＊24ページから19ページに遡る形で、後ろから左開き上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

ですが、一般論や全体論ではない。限られた三つの国の結び付きについて、提案と想念を差し出す。

まず、断っておきます。朝鮮半島には民国と共和国と二つが存在しますが、私個人の意識では一日も早く一国家一国民であるべきで必ずそうなると思いますので、私のこの文章では朝鮮、朝鮮国、朝鮮人、朝鮮国民と書くことを認めて下さい。

まず虚飾を捨てよう。朝鮮、中国、日本のそれぞれの権力者たちは、相互関係について昔も今も隣り合わせで仲がよいと決まり文句にいうけれど、内実は違う。人と人との付き合いの初歩の心得すら忘れるほど、荒れて歪んでいる。二人で道を行く時には「どうぞ、お先に」と相手を先に立てるのが常識ですね。そしたら、日本国の政府あるいは国民たちが、中国との親善を深める団体を作るとしたら、会の名は当然のこと「中日友好協会」となる。実際には両国とも順序の反対の会名を半世紀以上ぶら下げたままですね。

三か国の間柄をゆがませた主因は、日本国の対外侵略の罪です。そのことへの償い自体が中途半端で、その状態を完全に改めて清めることは日本人みんなの責任です。それ

と同時に、隣り合わせの近さゆえに親しく結び合える側面と同時に、肌あわせの間柄ゆえに結び合えないで反発しやすい側面もあるのでないか。そのことに気付いて、特に心を砕いて努力するべきであるのに、そこに三国とも落ち度があったのでないか。

「ディプロマシー」（＝外交）が使われ出したのは一八世紀以来とのことですが、原語はラテン語の「ディプローマ」で、旅券や公文書を意味している。官僚臭ぷんぷんですね。国と国、人と人との間柄は、そんなもので耕せるものではあるまい。芸術を創造するのと同じ性質の努力が必要でないか。種々の関係が近いからこそ、かえって結合しにくい難しさをしっかと肝に刻んで努力するべきでないか。私個人のことを紹介しよう。

私の幼少期は、日本の年号では大正期の遠い昔ですが、朝鮮服を着て、肩から箱を下げた人がアメを売りに東北農村にまでやって来た。チャルメラを吹いて、それから振り売りの声を張り上げてアメの宣伝をした。それを見ると、私は遠縁のおじさんが来たような親近感を覚えて、ついて回った。アメを買うカネがなかったけれど、でも心が和んだ。彼の振り売りのセリフは、私にも意味はわかりませんが、あれから約九〇年が過ぎたいま、私は同じ抑揚をつけて言える。――「チョウセン、ニンジロウ、エンバラ、エ

ンザン、ナットロウ」……アメにはこれほど親近感を持ったのに、朝鮮料理はダメです。私の胃袋に全く合わない。

一人の中国人と私との関係は、もっと難題でした。私の学んだ東京外国語学校では、外国人との交際心得が先輩から後輩へ語り継がれていた。「打ち解けて一生の友として付き合うのに最も信用できる相手はロシア人である」「ものの考え方から風俗、作法などで最も離れていて違う相手が中国人である。例えば、夫婦喧嘩だが、日本の夫婦は近所に知られまいと声をひそめるけれど、中国の夫婦は街頭に出て叫び合って、互いに自分の味方を増やそうとする」。

その一人の中国人と私の結び付きですが、一生のテーマとなった。相手は文学者の魯迅さんです。私より三五年先に生まれた人で、私はこの人だけに私の師であるとの感銘を受けて、その作品を読み続けてきた。

たった一つ、何としても私の受け付けない文章がある。『野草』という文集の中の「希望」と題した文章で、魯迅さんは四〇歳代半ばの自身と周囲の社会状況について明暗の交錯する思いをポエムのように述べたあと、ハンガリー詩人の一句を引用して「絶

望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい」と言った。これに私の脳細胞が反発した。「魯迅さんよ、絶望も希望もウソだというのですか。それならそうと断定して、人生の大切な問題を希望だの絶望だのと形容詞のような名詞なんかでは考えないで、ズバリその実体と格闘したら、と言ったらどうですか」と反発した。以来、この一句をめぐって魯迅さんとの対論、討論を繰り返したあとで私自身は『希望も絶望も共にホント』と認識し、更に経験と省察を加えて、この本のタイトルに掲げた判断に到達した。魯迅の一生の長さは五五年でしたが、それに一五年をプラスした年数をかけて、やっとそこに到達した。上海の「魯迅旧居」を訪ねた時、「手を触れるな」という制札（せいさつ）も何のその、師がそこに寝て死んだというベッドを隅から隅まで撫でた。その時はそれしか尊敬を表現するすべがなかった。

さて、今後の世界情勢ですが、絶望させられることがきっと続くでしょう。そしたら、絶望を余さずバリバリと食べましょう。それが糧となって希望を育てます。朝鮮、中国、日本の固い結合は、いつどのような事態でも、そこで生き暮らす人々のいのち綱です。互いに素顔で、地声で言いたいことを存分に語り合って協力すればよい。特別の方策な

一九二九年一〇月二四日・木曜日にウォール街を襲った大恐慌にアメリカ社会は完全に打ちのめされた。そこから悪戦苦闘して命がけで再起したアメリカ市民たちが、万事に世界トップという意識を育てた歩みは見事というべきかも知れない。その流れが第二次世界大戦につながって、アメリカ軍は世界の反ファッショ闘争の先頭に立って勝った。合衆国は種々の面でトップの地位に身を置いた。そのことは同時に、より高い所に身を置いて、お山の大将気取りに振る舞って落ちると、それだけひどい目にあうという教訓をも携えていたはずだ。アメリカの市民たちは、教訓に学んでいましたか。

アメリカの政治権力そして一般の市民たちは、いまの日本をどのように見ていますか。沖縄にある米軍基地の移転について、日本政府は国内のあちこちに懸命に打診した。引き受けたら出るに違いない基地交付金の巨額をちらつかせながら。でも、どこも首を夕テには振らなかった。四七都道府県のどこも、市町村一七二四（二〇一二年四月現在）のどこも、「アメリカの兵隊さんを私たちの所で引き受けます。おいで下さい」と言わなかった。米日軍事同盟もそれによる在日米軍基地も、実態は両国政府の言うのとは丸きり別のものだと日本国民は受けとめている。納得しないものを押しつけ続けると、どう

なるか。

第二次大戦が終わって六六年ですが、日本国民の対米意識は、いまどうかしら。ひところは親米派が七割か七割五分でしたが、今は三割程度かな。反米はいなくて、嫌米、「今のアメリカは嫌いです」が五割、残る二割が反米とどっちつかずではないか、と私は判断します。

よその国に対して、その国の営みに意見を述べるなんて、全くおこがましいと知りつつ、声を風に乗せて、アメリカさんよ、と言いたくなった。

バスでアメリカのあちこちへ出かけた時、公衆便所や休憩所、小公園などの社会施設の数が少なくて貧弱なのに驚いた。バス旅行の途中、数人の男性が尿意を催したら、バスが止まって男性たちが目の前の草原へ、ボタンをはずしながら歩いていった。そしたら、運転手が大声で「五歩以上は前に行くな、マムシがいる」と叫んだ。それほどまでに、そこら一帯は未墾の大草原だ。日本の人口の二・五倍の人たちが日本の二五倍の面積に住んでいる、その大きさ広さを意識させられた。もったいないですね。アメリカの人々は、外国に出かけて戦死するかも知れないエネルギーを国内のあらゆる開拓に向け

＊24ページから19ページに遡る形で、後ろから左開き上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

たら、どうだろうか、と私はアメリカの大地に自分のオシッコを吸わせながら思ったものでした。

アメリカ合衆国は出来て二三〇年そこそこですね。独立宣言のころ、日本では徳川幕府を老中田沼意次が牛耳っていた。長谷川平蔵という火付盗賊改方が三〇歳代の働きを見せていた当時だ。若い若い……若い国だ。だからこそ、エネルギーを自分自身の開拓に大切に使うべきでないか。

この文章を結びます。私は、戦争のない世を願い、そのために残りのいのちを用いています。先ず新しい世界大戦の発生を食い止めて、そのエネルギーを更に高めて一切の戦争の発生しない世づくりに向かわせないといけませんね。新しい大戦を発生させないために、アメリカと中国とロシアの三国関係が極めて大事な鍵となりますね。そこに住む人々が戦争に対してどんな態度を取るか、それが重大です。三か国の人々みなに「断固あくまで戦争否定の側に立って、その決意を貫いて」と私は頼みます。

この文章のはじめに、一人のアメリカ市民を思い浮かべながら書く、と書いた。その人にぜひ読んでほしいからです。物書きは、自分の文章が多くの人たちに読まれたら、

無論うれしいに決まっているが、それを私は望まない。望むのは、確実に一人の人に読まれることだ。そして、その人と私とに思いの交流が起こったら、連帯の始まりだ。そして一と一との一個の連帯が生まれたら、同様の出産があそこでも、ここでも、あちらでも続く。それが今日以降の歴史の特徴です。みんなの問題をみんなで協力して解決するという、全く初めての課題に、いま人間たちの誰もが試されつつある。みんなでみんなの「合作」を固めるため、一と一とのつながりが核として大切です。私の思い描いた一人のアメリカ人は必ずいると信じます。その人と肉声で語り合える日もきっと来るでしょう。その人よ、その日を待つ。

「世界連合」を中国に設けてはどうか

今の私は何をしゃべるにも書くにも、程なく消えていく世代の証言を孫、曾孫たちに伝えるためだと思って取り組む。すると、随分と老衰している身なのに活力が湧いてくる。有難いですな。歴史のリレーにもスポーツ同様にバトンが必要で、できるだけ人々の役に立つバトンを作らなくてはいけない。さて、きょうのバトンは国の外交に関して

度も胸をわくわくさせた。打ち明ければ、今の私の一番好きな言葉は「開拓だましい」だ。青年期の私は、外国語専修の学校に四年も通ったから、外国と外国人に対してハートは開けっ放しだ。それにしても、米市民に対して友を感じたのは、なぜだろう。

もう三〇年前だが、私ども夫婦はどちらも六〇歳代の半ばでしたが、アメリカ行きの団体旅行に参加した。西のサンフランシスコから東のボストンまで、北のナイアガラから南のニュー・オーリンズまで、一部分は航空機で大半はバスでの旅でした。いやな思い、ひどい目にあうことは全くなかった。行きずりの米市民たちに親切にしてもらった思い出は一杯だ。そして、アメリカ合衆国の政治権力の発散するじめじめした陰気と、市民大衆の中に生きているさっぱりした陽気さとの背中合わせ、これが合衆国の不幸であって、よその国との付き合いにも暗影を作っているのでないか、という疑問が私の心の中にあぐらをかいた。合衆国でも、主権を持つ市民みんなの願いも、その人柄も現実の政治には生かされないで、政治権力の実体は別の要素で作られて動かされているのでないか。アメリカ政治への私の不信です。

だから、二〇〇九年一月に某新聞社から「アメリカに黒人の大統領が登場したことを

どう受けとめるか」と質問されたとき、ストレートに喜ぶべきで、そのように喜べばよいと思いながら、「バラク・オバマ氏はオバマ共和国の大統領になったのではない。アメリカ合衆国の大統領になったのだ。あまり期待しない方がよい」と冷気を含んだ返事をした。

建国から四四代目で初めて黒人の大統領が登場したことは、遅過ぎたか、早過ぎたか、適当かは言えない。はっきりしていることは、アメリカの政治権力の体質は大統領の皮膚の色なんかで簡単に変わるわけがないことだ。それよりも私が心配したのは、暗殺されたりしないか、という恐れでした。暗殺の心配についてアメリカ市民の気持ちはどうでしたか。それを心配した老人が日本にいたことをどう思いますか。

私の心配は本日まで全く不要でした。一切は不要のまま完了すると念じますが、なぜ私はあんな心配をしたか、自分で自分を検討するために記録を調べた。暗殺された大統領は、一六代リンカーン、二〇代ガーフィールド、二五代マッキンリー、三五代ケネディの四人で、暗殺未遂でよく知られているのが四〇代レーガンだ。これまで大統領だった四四人のうち悲運に見舞われたのは約九パーセントだ。この数字は少ないとも、多い

＊24ページから19ページに遡る形で、後ろから左開き上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

とも言えない。本来は常にゼロであるべきだ。ともあれ、他国と比べて極端に多いとは言えないのに、日本のこの老人は、米大統領のイスにしめっぽい陰影を感じた。なぜだ。過去については言えないが、今日唯今については言える。言えるし、言いたい。ともあれ記録しておけばよい。そう思って書き始めた、この文章だ。では、ズバリと本題に入って言おう。

アメリカ政治は、ひとりで思い上がって舞い上がっているのでないか。国際連合あるいは国際会議で「アメリカ合衆国よ、頼みますよ」と決議されたわけでもないのに、まるで人類の裁判官か救世主づらをして、出しゃばり過ぎてきたな。二つの要素がそうさせていると私は診断する。一つは、アメリカはアングロサクソン人の直系の後継ぎで、その遺産を引き継ぐ資格と責任を持つという意識だ。も一つは、アメリカは何ごとにも世界のナンバーワンになれるし、なって他を導かねばならぬという自負心または自惚れだ。

建国のために働いた最初のアメリカ人はイギリスの直系に違いない。だから、イギリスが国力を衰えさせて旧植民地を支配できなくなった時にアメリカが出ていく順番かも

知れない。それをするなら、イギリスがこの数世紀に世界のあちこちで何をやったか。それをきちんと検証した上で、どこの何を相続するかしないかを決めるのが順序でしょう。例えばイギリスがイスラム教徒の国々にどんなにひどい裏切りをしたか、それを心あるイギリス人がいかに悔いているかは、例えば『アラビアのロレンス』（中野好夫著、岩波新書、一九六三年）という新書本を一冊読めばすぐわかる。そんな努力なしで遺産相続に飛びついたのでしょう。アラブの人々の恨みをアメリカが一身に引き受けてしまった。バカ臭い話ですが、もっとバカ臭かったのは、ベトナム戦争ではないか。

アメリカが何ゆえフランス植民地の後始末に乗り出したか。欲が深すぎたか、思い上がりのせいか。ベトナム農民は、戦えば戦うほど戦利品を増やし、ついに多くの海兵隊員を袋のネズミにして、和平交渉をアメリカに迫ったでしょう。アメリカの政府と市民たちは、なぜ自分たち自身の経験に学ばなかったのでしょうか。

アメリカ市民の世界ナンバーワン意識の形成については、アメリカの社会学者たちがいろいろと分析を加えているようで、他国人が口をはさむ必要はないでしょうが、一言言いたい。

＊24ページから19ページに遡る形で、後ろから左開き上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

結章　足元から世界を耕す

アメリカ市民よ、戦争否定の側に立って！

一人のアメリカ市民を目の前に思い浮かべつつ、ペンを走らせます。

私は生まれて九七年目を生きつつある日本の一老人です。報道と評論の仕事を七六年も続けて来たが、アメリカ合衆国をテーマにした文章は一つも書いたことがない。おかしなことですが、振り返れば、そうなっている。なぜだ？　なんとなくそうなってきたが、敢えて言えば、合衆国の政府に対するのと、市民に対するのとで私の判断が一致しないせいだろう。米政府の対日政策は、間違っている。両国のどちらのためにもならぬ。一日も早く、全く対等での相互関係に改めねばならぬ。他方、米市民に対して私は何とも形容できない親近感、そして期待感を持ってきた。この両方の噛み合いをうまく処理できなくて、それゆえにアメリカについてまとまったことを言えなくしてきた気がする。

その米日関係に何の変化もないのに、なぜ本日ここにペンをとってアメリカについて書き始めるのか。理由は、米日両国関係がいつまでも変化しないからだ。早く根本から

変化させなくてはならぬからだ。私のこの思いは、おしまいまで読んでもらえば、解っていただけるでしょう。

米日両国政府の関係を、なぜ私が肯定しないか。一対一の対等ではないからです。私の判断では、一九四五年八月から本日まで、歴代の合衆国政府にとって日本国は、ステート・ナンバー51のサーバントだ。そして日本側では、吉田茂内閣このかた歴代政府の大部分を担当してきた保守主流の政党は、「主権者たる日本国民に依拠して」と決まり文句を口にしながら実際には合衆国政府の威光をカサに着て、自分らの利益中心に動いてきた。国民の生命や仕事や家屋敷や田畑などを安全に守ろうとする誠意も熱意も全くいい加減だったことが、自然の災害のたびにむき出しにされてきた。米日両国の政府関係は、明らかにどちらのためにもならぬ間違いを犯し続けてきた。と言って私は特別に反米や憎米を言ったり書いたりしたことはない。米政府の間違いは、自分で出来るだけ早く気付いて改めればよい。そして私たち日本国民は、愚かな政府を許して支え続けて来た自分たちの二重三重の愚かさを一刻も早く抉り取るために働かねばならぬ。それが私の思いで、そのために働き続けてきた。

ふと思い出したが、私が東北の農村地帯で一九四八年に『週刊たいまつ』を創刊して五か月ほどたった時に妙な電話がかかってきた――「三笠という検事です。きょうGHQの民間諜報局に参考人として呼ばれて行ってきた。君たちの新聞に発刊禁止の命令を出すかどうかが議題だった。アメリカ人三人のうち一人は、この新聞はアメリカの対日政策に反対する有害な存在だと言った。他の二人は、反米主義はなくヒューマニズムが強いとかばった。それで今回は決定見送りとなったが、気をつけた方がよくないか」と。おかしいですね。『週刊たいまつ』は占領軍やGHQのことを直接に扱ったことは全くないのに、なぜ廃刊命令なんかの対象にされるのか。もしかしたら、GHQは自分たちの対日政策は間違っていると知りつつ強行していたのであるまいか。ともあれGHQから廃刊命令が来たら、その翌日に新しい新聞を出すと腹を決めた。それを日本国憲法は保障している。新しい題号は無論『週刊まっくら』だ。

では、米市民に対する私の親近感、期待感は何から生まれたか。自分のことなのに自分で説明できません。少年時代にストー夫人の『アンクル・トムの小屋』を読んで、興奮して何度もこぶしを振りかざした。西部劇の映画を見て、開拓だましいの躍動に、何